



清水

五割



らくは

一分

玄関の前に、高校生ぐらいの女の子がいた。大きなリュックを抱くように座っていて、髪の毛はぼさぼさ、服も薄汚れている。階段を上ってくる僕を見つけるなり、喉を震わせてずっと僕のことを凝視している。僕がもう少し歳を取っていたなら、生き別れになった娘と再会したかのようなシーンだ。僕はこの子に全く見覚えがなかった。

「先生」

か細い声で、女の子は言った。その呼び方で、僕のことをある程度知っているのだろう、と推測できた。

「君は……誰」

「私……先生を探してここまで……あの……」

くぐもった、震えた声だった。

「うん、僕に会いに来たんだね」

「……弟子にしてください」

「……はあ？」

「あの……私……将棋のプロになりたいんです。だから、弟子にしてください」

今にも泣き出しそうな顔なのに、真剣なまなざしにはぐっと力がこもっていた。しかしあまりに予想外の言葉に、すぐには何も言葉を返すことができずにいた。

「どうしても……プロにならないといけないんです。でもプロになるには師匠が必要で……他にあてもなくて……」

「……よくわからないけれど、本気なのは分かるよ。ここじゃ何だし、とにかく中に入ろう」

「すみません」

鍵を開け、女の子を家の中に誘った。運よく掃除したばかりで、それほど部屋は散らかっていない。

「座って。何か飲むものを入れるよ」

「すみません」

やかんを火にかけて、戸棚からカップを取り出す。ちらりと振り返ると、女の子はテーブルの前でやっぱりリュックを抱えて座っている。

「名前は」

「……金本月子」

「うーん」

名前も聞き覚えがない。いや、しかし……

「はい、紅茶」

「あっ」

粉で出すアップルティーがあったので、それを入れてあげた。月子さんは、口を付けずに両手でカップを握りしめている。

「すごく……あったかい」

「体が冷えてるんじゃないか。飲みなよ」

「はい」

促されて、月子さんはそれを一気に飲み干した。まるでサラリーマンが一杯目のビールを飲むときのような感覚だった。僕はしばらく凝視してしまった。

「……ご……ごめんなさい、久しぶりにちゃんとしたもの飲んだから……」

「もう一杯入れようか」

「……お願いします」

月子さんは顔を真っ赤にしているが、それでも断らなかったのは、よほど喉が渴いていたのだろう。立ちついでに、買っておいだしたスナック菓子も持ってくる。

「食べなよ」

「……え」

「お腹すいてない？」

「……すいて……ます」

最初は僕の方をちらちらとうかがっていたが、一度手を付けると、すごい勢いで食べ始めた。この子には、師匠以前に今すぐ必要なものがいっぱいある気がしてきた。

「で、誰に紹介してもらったの？ 会ったことはないよね」

「……父に」

「お父さん、僕のこと知ってるの」

「……金本六段って言えばわかるって」

「……金本……六段？」

今も昔もそんな名前のプロはいない。だが、なんとなく「金本六段」という響きには覚えがあった。どこだろう、将棋以外ということもないだろう……

「金本……金本……のおじさん？」

「そう呼ぶ人もいます」

「ハンチングの」

「よく被ってます」

「あーあー、六段って言うからわからなかった」

金本のおじさんは、地元でお世話になったアマの人だ。小さい頃から道場でよく将棋を指してもらい、たまにはお菓子も貰った。大会などでそれほど活躍していた記憶はないが、六段の免状を持っているのが自慢だと聞いたことがある。そのことは今でも疑っているが。

「その父が……三東先生に頼めばなんとかしてくれるって」

「なんとか、ねえ……。まずさ、なんでそのお父さんは一緒に来てくれなかったの。おじさんが来ればすぐ分ったのに」

「父は……その……」

月子さんは突然肩を揺らしてもじもじし始めた。別に変なことを聞いたつもりはないのだが。

「どうかしたの」

「……外に出られないんです」

「……は？」

「私たち、借金がとても多くて……。だから、だから私がプロになって、借金を返すんです！」  
「……」

開いた口がふさがらなかった。今まで将棋のプロやプロを目指す人を数多く見てきたが、こんな理由は前代未聞だ。だいたい、将棋棋士がもうかる仕事だと思ったことがない。少なくとも僕は貧乏だ。

「お願いします！力を貸してください！」

「……プロになるには、条件は一つしかないよ。勝つこと」

「……はい」

「でも、君はプロになるだけじゃだめだよ。借金を返すには、プロとしてもうんと勝って、稼がなきゃならない」

「……はい」

「今まで女性でプロになった人はいない。それでも、目指すのかい」

「はい」

突然、とんでもない案件が舞い込んだものだ。僕には任せておけ、と胸を張るだけの度胸もなければ、お断りだ、と突っぱねるだけの勇気もなかった。

「とりあえず、それ着替えようか。シャワーも浴びなよ」

「……本当にすみません」

「大変だったろ。その……お金ないのに、どうやってここまで来たの」

「自転車で」

「自転車？」

「……それしかなかったから……」

僕は押し入れの中から、ジャージを取り出した。黒色に赤いライン。別れた彼女が使っていたものだから、本当は目にもしたくなかったが仕方がない。

「ピザ取ろう。好きかい」

「……食べたことが……ないです」

「そっか。きっと好きになるよ。これ、ちょっと大きいと思うけど」

「……突然押し掛けて……こんなに……本当に……」

「ここまでは君のお父さんに世話になった分だよ。けれど、将棋のことは別。ご飯を食べたら、試験だよ。将棋を見せてもらう。それでだめなら、弟子にはできない。悪いけど、帰ってもらう」

「……わかりました」

ついに、月子さんの瞳から涙がこぼれ落ちた。緊張の糸が切れたのか、そのあとわんわん声を出して泣き始めた。そして、それを隠すように、すっと立ち上がり浴室へと走った。

残された僕はとりあえず、本棚の前方にある漫画と、奥にある将棋の本とを入れ替える作業にいそしんだ。もし万が一彼女が強かった時に、自分の弱さがばれてしまうのはとても辛い。



驚いたことに、月子さんはコーラを飲むのも初めてのようだった。少し飲みこんで、「これが噂のしゅわしゅわ……」とつぶやいていた。

ピザを食べながら、少しずつ話を聞く。この前中学校を卒業したばかりで、まだ十五歳。とはいえ、プロを目指すには少し遅いぐらいだ。将棋は父親に習い道場に行くこともあったが、実家の工場経営が苦しくなり道場代が払えなくなった。家からもなかなか出られなくなり、父と隠れるように将棋を指すようになった、とのこと。

そしてある日、金本のおじさんは言ったのだ。「月子ならプロになって、お金を稼げるかなあ」

「じゃあ、月子さんはプロに将棋を見てもらったことはないの」

「……はい。会ったのも今日が初めてです」

「うーん」

正直、期待薄だと思った。自称六段のおじさんが、身内贔屓も含めて保証しただけとは。

「まあいいや。とりあえず、指そう」

「わあ！」

対局をしようと盤駒を引っ張り出すと、なぜか月子さんは目を丸くして大きな声を上げた。

「どうしたの」

「こんな分厚くて脚付きの……初めて見ました」

「そう」

この調子では、ありとあらゆるものに驚き続けてしまいそうだ。案の定対局時計を取り出すと……

「こ、これって個人で買えるものなんですか」

「まあ、お金出せばね」

「やっぱりプロの先生ってお金持ちなんですね！」

これぐらいのことで感動されては、とても申し訳ない気持ちになってくる。名人の家など見たら卒倒してしまうのではないか。

「振るよ。……月子さんの先手だ」

歩を五枚取り上げ、振り駒をした。時計を三十秒の秒読みに合わせる。

「お願いします」

「おっ……お願いします」

盤上に伸びた腕は細く、指もとても短く見えた。そして、白い。1九から盤を横切って、2七の歩をつまんだ。駒に触れた瞬間、震えていた手が力強く伸びていくのが分かった。駒音が高く響き渡り、初手2六歩。

顔を覗くと、目じりは上がり、頬も引き締まっていた。先ほどまでのおどおどした感じは全くなくなっており、獲物を狙う猛禽類のような顔つきになっている。ここまでは、合格点だ。

少し予想外の初手だが、それならばこちらも試させてもらうしかない。僕は8三の歩をそっと

一マス前にはじき出す。二手目、八四歩。アマチュアが苦手とすることが多い、相掛りに誘導する。月子さんは圧倒的に実戦経験が足りてないはずなので、プロの対応に惑わされる可能性が高い。そこをどう乗り越えるか、それをこの対局で試験させてもらう。

飛車先の歩を切ったあと、月子さんはその飛車を二六に引いた。最近の流行は深く引く二八飛だが、そんなことすら知らないのかもしれない。とりあえず、しばらくは普通に対応するつもりだった、が。

月子さんは、僕が飛車先の歩を切って深く飛車を引いた手に対して、九七角と指した。瞬間、僕の飛車は八九に成りこむことができる。しかしそれには八八角と戻って竜が閉じ込められてしまい、こちらが不利になる。プロならばだれでも知っている展開だが、アマでこれを指しこなす人は少ない。金本のおじさんがこういう将棋を指していた記憶もないし、月子さんはそれなりに勉強をしているということなのだろうか。

僕としても、あまりこの形の実戦経験がないので一手一手が慎重になる。負けることは万が一にもないのだが、できるだけ月子さんの実力が分かるような局面に誘導しなくてはならない。常に半歩差しかつかないような局面を作る。これはプロになってから鍛えられた技術だ。

いたってオーソドックスな駒組みで迎え撃つ……ように見せかけて、僕は罠を仕掛けておいた。漫然と駒組みを進めれば、こちらには用意の駒組みがある。もちろんそれだけで有利というわけではないが、現代的な感覚では負けにくい形だ。歩を伸ばす、銀を出す、それらの手ならば、三三玉とする。一見不自然な形だが、次に二二玉から一二香として穴熊に囲う。そうなれば、後手も強い戦いができる。

月子さんの手が、また盤上を横切った。その手つきは優雅だ。そして九七の角をつまみ、七九へ。全く考えていなかったし、見たこともない手だった。それでも、悪い手とは思わなかった。その角は遠く一三をにらみ、駒組みに制限を与えている。

僕は、二二銀と指した。月子さんの力のある程度信用し始めていたのだ。プロになれる云々は分からないが、少なくとも弱さは感じられない。個性も迫力もある、魅力的な指し手だ。何より、目つきがいい。目の前の獲物をしとめなければ餓死してしまうと言った、とてつもない切迫感が伝わってくる。

だが、問題は駒がぶつかってからだ。僕らプロがアマより優れているのは、駒の潜在能力を見極める力だ、と思っている。将棋の作りによって、役に立つ駒、立たない駒が変わってくる。また持ち駒にしておくことで相手にプレッシャーを与えられる駒もある。駒台を盤上に反映させる、その能力の足りないアマが多い。持ち駒は使わないのが一番いい、なぜなら駒台にある限り相手に取られないからだ。しかし多くの方は、持ち駒を使いたがる。手下を簡単に戦場に送るのは、愚かな将のすることだ。

歩がぶつかり、局面が動き出す。秒読みなので、加速した流れはなかなか止まらない。月子さんは直接手を指さず、じんわりと駒を前に進めてくる。女流プロでもなかなか指せない、落ち着

いた順を選んでくる。しかしがっぷり組んでしまえば、こちらの方が地力は上なのだ。僕の駒台に歩が増えていく。いずれこの歩は、1筋の端攻めに役に立つ、かもしれない。その可能性がある、というだけで非常に価値が高いのだ。

だが、相手の手をつぶすようなことはしない。どのような組み立てで攻めてくるのか、それを見なければならない。強い人には天性の「すじ」がある。定跡や終盤は地道に勉強することができるが、「すじ」だけはどうしても修正できないものだ。どれだけ指導しても両取りばかりかけてしまう人、全然響かないところの駒を取りに行く人、歩を突き捨てられない人、と金を作れない人。これはもう、直しようがないのだ。他のところで強くなることはできるが、筋の悪い人は僕らの側には来ることができない。

果たして、月子さんのすじはどうか。ただ、形に明るいただけなのか、それとも天性のものがあるのか。

チェスクロックは容赦なく時間の経過を宣告し続ける。三十秒は短い。世の中には、一手に対して五時間以上考えたプロもいる。昔は、時間無制限で何日もかけて一局を指したという話もある。それに比べこのような練習将棋は本当にあわただしく、作品を創出する作業からは程遠いものとなっている。

1七桂。残り一秒で指されたのは、全く予想していなかった手だ。この桂馬は次に2五にしか飛べない。決して筋がいい手とは言えない。しかし、考え方としてはすじが通っている。歩損をしており、攻め始めたのならそれを貫きとおさねばならない。多分その攻めは僕には通用しないだろう。しかし万が一にも僕に勝つことがあるとすれば、それは、攻めの姿勢を貫いたときだろう。

このような展開になると、自然と指が伸びてくる。僕は何回もこのぐらいの棋力の人と指しているが、月子さんはプロと指すのは初めてだろう。正確に読み切れるということは、大きな武器だ。大ナタを振り回す攻めは、空振りしてしまえばそこで終わりだ。

こちらはじわじわと相手を圧迫していく。5七歩、そして2六歩。だいたいこれで勝ち、そう思った。だが、月子さんから異様な気迫を感じた。顔を上げると、額に手を当て、激しく瞳を動かしながら必死で何かを探している姿があった。もがいているという感じではない。あるはずの答えを必死に探求しているようだった。

髪をかきむしり、少し宙をさまよった後、その右手は駒台へと伸びた。歩をつかみ、2七へ。玉の頭の傷を消す一般的な手筋だが、僕は全くその手を読んでいなかった。これまでの流れから逸脱する手だからだ。そして、いい手だった。

頭の中で、スイッチを切り替えた。もう、テストは十分だ。自称六段の客観性はいまだに疑わしいが、それでも月子さんの実力は確かにプロを狙ってもおかしくないものだった。それがわかれば、後は将棋本来の目的……勝利を目指すのみだ。

想定よりは手数が伸びたものの、逆転の目はない。最後は緩みのない攻めで、先手玉を追い詰めた。受けがなくなったところで、月子さんは頭を下げた。

「負けました」

「うん」

唇を噛んでいた。負ければ悔しい、当たり前のことだが、できない子もいる。

「なかなかだね。十分可能性はあるよ」

「……本当ですか」

「もちろん、これから次第だろうけど。色々な戦型も見えないといけないし、優勢な将棋の勝ち方とか。まあ、しばらくは試験延長かな」

「じゃあ、これからどうすれば……」

「君、お金持ってないんだろ」

「……はい」

「こっちに知り合いとかいる」

「……ないです」

「しょうがないな。そのロフト、貸すよ」

僕は、斜め上を指さした。天井にぶら下がるようにあるその空間は、人一人が眠ることもできるスペースになっている。

「……いいんですか」

「すごい暑いよ」

「全然問題ないです」

「あと、家賃は借金ね。食費も、光熱費も付けていくよ。僕はボランティアするほど優しくないし、余裕があるわけでもない。早くプロになって、僕への借金も返してくれ。それでも良ければ、師匠になるよ」

「……はい」

いい人と思われるのが嫌だった。本当はお金のことなんてどうでもよかったけれど、気が付いたら言っていた。

「ありがとうございます。……本当に……」

肩を震わせながら、月子さんは泣いていた。これからは、もっとたくさんの悔し涙を流すことになるだろう。



金本月子十五歳との、奇妙な生活が始まった。

「あの……すみません……」

色々なことがずれている子だとは思ったが、まず最初に驚かされたのはリュックの中身だった。てっきり着替えが詰まっているのかと思っていたら、出てきたのは分厚い本が五冊。

「小川靖男全集……。これは……」

「……父が唯一売らなかったものなんです。……何度も何度もこれを読んで勉強しました」

そのうちの一冊を開いてみると、どのページにもびっしりと書き込みがしてあった。月子さんなりの感想や検討を記入してあるのだ。

「ずっとこればかり？」

「はい……」

小川靖男は、名人を七期務めた偉大な棋士だ。粘り強い指し手に定評があり、「受け方の定跡」を作ったとまで言われている。

「あの、服とかは……」

「これだけです……」

月子さんが取り出したのは、小さなスーパーの袋。中身を見せてはもらわなかったが、大きさからして下着が数枚だけだろう。

「とりあえず……明日買い物に行こう」

「はい」

ロフトに布団を運びこみ、とりあえず彼女の居住スペースを作った。一畳ほどの広さしかないが、正座できるぐらいの高さはあるし、電源もある。

「このスイッチでここの電気が付くから。トイレ行くときとかは気を付けて」

「はい」

自転車をこいでここまで来て、その上真剣に将棋を指したのだから、ひどく疲れていたのだろう。すぐにロフトから寝息が聞こえてくる。

外に出て、駐輪場に向かった。そこには、薄汚れた、ぼろぼろの自転車が止めてあった。かごは歪んでいるし、タイヤのホイールも曲がっている。彼女はあのリュックとこの自転車だけでここまでやってきたのだ。会ったこともない、僕を頼りにして。

僕は、すぐに寝る気にはならなかった。帰宅してからの数時間で、考えてもみなかったことが起きている。頭の中がぐちゃぐちゃで、ぐらぐらと揺れている気さえる。

僕はまだプロになって四年目の若手棋士だ。弟子を取るなんてことは考えたこともなかった。しかも今どき内弟子なんていうのはほとんど聞かない。そして何より問題なのは……月子さん自身が、僕のことを何も知らない、ということだった。

三東幸典、四段。プロになってからのこれと言って目立った成績はない。いや、むしろ悪い方で目立ってしまっている。通算勝率は四割を切り、順位戦では三期連続負け越しで、一つ降級点を取っている。早指し棋戦での予選突破もなく、そのため当然ながらテレビ棋戦で戦ったことがない。あまりの不出来ぶりに、陰では「四東三段」というあだ名まで付けられているようだ。

月子さんは、よりもよって今一番弱い若手棋士のところに弟子入りに来てしまったのだ。確かに、地元では一番強かった。しかしプロは皆、故郷では一番強いアマだった。奨励会時代は何度も降級の危機にあい、三段リーグでも連続四期負け越した。それでもたった一度の勝ち越しを、何とか昇段につなげて四段になることができた。自分でも奇跡のようだと思った。そして奇跡は、プロの世界では起こらなかった。

今はまだ、月子さんの遙か先を行っている。けれどもこれから月子さんがプロになるには、借金を返せるぐらいの強いプロになるためには、僕を追い越して遙か先まで行かなければならない。

僕に弟子を取る資格なんてあるのだろうか。弟子を育てる才能なんてあるのだろうか。そもそも家に少女を住ませるなんてこと、周囲から見たら許されるのだろうか。ぐるぐるは続く。

通帳を開いてみた。彼女の部屋を借りてやれるほどの収入は、当たり前だがない。かといって僕にも頼れる人はいない。師匠は亡くなってしまったし、他の棋士との交流も避けてきた。いっそベテランの先生のところに行って、代わりに師匠になってくださいと頼めばいいだろうか。その方が月子さんのためになるのならば……

これまで、女性でプロの正会員になった人はいない。確か、二段ぐらいが最高だったはずだ。あきらめて女流棋士になる、というのでは月子さんの場合意味がないだろう。勝って勝って勝ちまくって、借金を返さねばならないのだ。女流トップの収入は、平均的な男性棋士ぐらいしかない、と思う。

ふと、彼女がそんな運命を背負わねばならないのだろうか、と思った。月子さんには、将棋を楽しみながら強くなるだけの素質があると思う。焦らずゆっくり勉強していけば、時間はかかっても芯のある棋士になれるかもしれない。または、アマ強豪として仕事しながらでも将棋を楽しめるようになるかもしれない。けれども彼女は、とにかく急いで強くなろうとするだろう。しかもそれは将棋を楽しむためでも、極めるためでもないのだ。

そもそも、彼女は将棋が好きなのだろうか。

プロは、だいたい将棋が好きだ。だから続けられる。深夜まで及ぶ熱戦を負けても、将棋が嫌いになるのは数日だけだ。気が付けば将棋のことを考え、他の対局結果を調べている。棋譜を並べ、詰め将棋を解き、次の対戦相手のことを考える。僕のようなへぼ棋士でも、普段からさぼっているわけではない。義務ではなく、将棋に関わることが自然になっているのだ。

部屋に戻る。相変わらずの寝息。誰かがいるという、不思議な感覚。

「おやすみ」

頭が痛くなってきた。聞こえていないと分かりながら、久しぶりの言葉を呟いた。



「あの……」

すぐに将棋の勉強、というわけにはいかなかった。何せ彼女は本と下着数枚しか持っていないのだ。普通に暮らしていただけてもいろいろとそろえなければならないものがある。まずは、自転車を修理に行った。正直新しく勝った方が安いと思ったのだが、本人のためにならないと思った。その自転車は、月子さんの人生にとって大きな意味を持つものになるかもしれないのだ。そのあとは、買い物だ。

「いいんですか、こんなに」

「もちろんこれも借金ね」

僕自身女の子の服なんてよくわからないので、スーパーの二階にある洋服店で適当にそろえた。普通のこの年頃の女の子なら、「こんなところじゃいや！」と言うところだろうが、月子さんの眼はきらきらとしていた。よほど普段から何も買ってもらえなかったのだろう。

「いいかい、ただ将棋が強ければいいってことじゃないんだ。プロ棋士は将棋の発展や普及も仕事。人に見られて恥ずかしくない格好やたたずまいをしないといけない」

「はい。いろいろと教えてください」

本当は、僕は師匠から将棋以外のことはほとんど教わっていない。今は、名義だけを貸すような場合すらあるのだ。しかし月子さんの場合、僕が親代わりとならなければいけない。親……そういえば。

「家に連絡しないとね。僕からも挨拶しとくよ」

携帯を取りだした僕を、月子さんは気まずそうな顔をして見上げている。

「あの……今は通じないと思います」

「え」

「よく止められるし……その……電話線を抜いていたり……」

思った以上の惨状だ。そんな状態では仕事の受注もできないではないか。

「私……手紙書きます。だから……切手代も貸してもらって……いいですか」

「あ……ああ」

僕はだんだん、腹が立ってきた。それほどまで切迫したつけを、こんなに若い女の子に払わせる親は絶対に正しくない。棋士になって借金を返すなんて言っても、止めるべきではないか。そのために昔少しかかわりのあっただけのプロを紹介するだなんて、無責任過ぎないか。

「あの……父が言っていた通りでした」

「なにが」

「とっても優しい子だったって。……あの、はい」

「まずは、大人に騙されないことから教えないといけないね」

「……え？」

ついでに、美容院にも寄った。月子さんの髪の毛はよく見るとぼさぼさで、聞けばいつも母親に切ってもらっていたらしい。

これは本人には言わないつもりだが、月子さんがプロになるためには、想像以上に女性である

ことが足かせになるはずだ。僕自身何局か経験があるが、やはり女の子には負けられない、と  
ってしまう。かといって男性に同化すればいい、というわけではない。どこまで行っても、将棋  
という男性社会の中で女性は異質なもののなのだ。だから、それを逆手に取るべきだと思う。月子  
さんは磨けば光ると思うし、異性として意識されるぐらいきれいになって、対局相手に余計なこ  
とを考えさせるべきだ。将棋に真摯に向き合うならば、邪道な考え方かもしれない。しかしこち  
らの目的はお金なのだから、どうとでもして勝たねばならないのだ。

「あの、今日はどうされます？」

「え……短くしてください」

「どのような感じに」

「……さ、さっぱりと」

月子さんは美容師とのやり取りもなかなかうまくいかないようだ。まあ、初めてなら無理も  
ない。

それでも全てが終わると、全く見違えていた。髪は全体的にふんわりとして、野暮ったい感じ  
が消えていた。眉毛も剃ってもらったのか、目の周りもすっきりした気がする。さすがプロ、本  
当にさっぱりにしてくれたようだ。

「あの……どうになりました」

「鏡で見たまんまだよ。いいんじゃない」

とりあえず、今すべきことはこれぐらいだと思った。これ以上のことは本人の責任だと思っ  
たし、正直化粧云々になると何をしたいのかよくわからないのだ。

「なんか食べて行こうか。何がいい」

「え……いんですか、外食なんて」

「まあ、そんなたいした店にはいかないから」

「……もう、五年ぐらいお店で食べてないんです。どんなお店があるかもわからないし……」

「わかった。じゃああれに行こう」

「あれ？」

僕は、自分が初めて東京に連れてきてもらった時を思い出した。あまりに色々なものがあり  
すぎて、目が回りそうになった。そして父親は、「都会にはすごいものがあるんだぞ」と言ってそ  
の店に連れて行ってくれたのだ。

「わあ」

店に入るなり、月子さんはとてもいい反応をした。僕も、同じような感じだった記憶がある。  
「本当に回ってる……」

月子さんはしばらくその場に立ち尽くしていた。さすがに僕はそこまではならなかった。

「月子さん、座るよ」

「は、はい。……大人になる前に、回転寿司に来られたなんて信じられません」

「……ここは、おごりでいいや。いっぱい食べて」

「そ、そんな、滅相もございません」

テンションが上がりすぎて、言葉遣いまで変になっている。見ていて微笑ましい。

「何してるの、取りなよ」

「あ、あの見たことないものばかりで……何を取っていいのか」

「しょうがないなあ。取ってあげるから食べなよ」

何となく回転寿司の дайご味を味わえていない気もするが、月子さんは僕の選んだ皿をゆっくり時間をかけて食べ、その度に感嘆の言葉を漏らしていた。なんだか自分が大富豪になって、遠い国から養子を迎えたみたいな気分になる。

「多分……生まれて初めて貝を食べました」

「へえ」

「早くプロになって、いっぱい回転寿司に来たいです」

「うーん、そうだね」

もし月子さんが訪れたのが僕のような弱いプロでなければ、寿司は回っていなかったかもしれない。まあ、玄関で門前払いされた可能性も高いが。

そういえば僕も、プロになったらおいしいものがいっぱい食べられる、と子供の頃は思っていた。大きな家、いい車、綺麗な奥さん。将棋が強くなるだけで、全てが手に入ると思ったのだ。

もちろん、もっともっと強くなれば、手に入るのかもしれない。同期の一人は挑戦者リーグ入りしたり、新人戦で優勝したりしているが、つい最近外車を買ったと言っていた。二四歳でタイトルを取った先輩は、二五歳で結婚し、二七歳で都内のマンションを買った。

上を見ればきりが無い。よく言ったものだ。

「家族にも食べさせてあげたいです。うん、決めました。最初のお給料は、ここに来ます」

「そうするといいよ」

無邪気な笑顔に、なぜか少し心が痛んだ。いや、理由は分かっている。月子さんの進む道は、果てしなく険しい。たとえプロになれたとしても、親の借金や、周囲の好奇心や、勝負の厳しさが重くのしかかってくるだろう。彼女はまだ、そんなことを知らない。

「あ……でも、まずは先生にお金を返さなきゃ」

「そうだね」

帰りは、いっぱいの荷物を抱えて地下鉄二つ分の距離を歩いた。二人の共通の故郷の駅から、二人とも少し遠いところに実家があるという話をした。そしてふと、月子さんはつぶやいた。

「……毎日あの駅まで歩くんだあって、ちょっと思ったんです」

最初、僕はその意味がわからなかった。そして家に着くころになって、ようやくわかった。そういえば僕も、毎日あの駅から電車に乗って、高校まで通っていたのだ。

そう、普通は女子高生になる年齢なのだ。今はほとんどの奨励会員が高校までは行っている。この世界で生きるにしても将棋以外のことを知ることが大事だし、結局将棋の世界から離れていく人も多いのだ。

月子さんも高校には行くべきだと思う。けれどもそれを決めるのは僕ではない。そこまでサポートしてあげることもできない。もし高校に行きたいと望んでも、それを許さない家庭環境を恨むしかないのだ。

「よし、毎日歩くことを義務としよう」

「はい」

扉を開ける。今からここは、戦場になる。

「ただいま」

なんとなく言ってみた。

「あ……ただいま」

月子さんもつられて言った。

「さあ、将棋だ」



小川靖男全集を教師としているだけあって、月子さんの指し手は本格的だ。他の若い子には見られない、腰の入った受けが時折見られる。しかしまた、軽いさばきやとにかく固めるといった現代的な感覚は全く持っておらず、序盤から苦戦に陥ることも多い。……とまあ、これが何局もぶっ続けで指し続けて得た感想だった。

奨励会に入れるかと言うと、今のままでは無理、というのが率直な意見だ。

「もっと勉強しなければいけないね」

「はい」

「二か月で2400点。これが次の試験だ」

「2400……点？」

「ええっとね……」

パソコンを起動させ、インターネットにつなぐ。月子さんはそれすらとても興味深そうに眺めている。

「これをするんだよ。将棋道場365」

「これが……道場？」

ログインしただけでは、ただハンドルネームと数字が縦に並んでいるだけにしか見えないこのページは、まぎれもなく将棋道場だった。しかも年中無休(四年に一度だけ休みがある)、そして無料。

「そう。ここで名前を作って、世界中の人と指すんだ。勝つと点数が増えて、負けると減る。それで、2400になったら合格」

「よく……わからないです」

「まあ、見てて」

とりあえずレーティング対局室に入り、「早指待」に設定する。十秒後、小さいウィンドウが開き、「挑戦 katto-01」の文字。「承諾」ボタンを押すと、また新しく中くらいのウィンドウが開き、その中に将棋の盤駒、駒台のイラストが現れる。

「わあ」

「ここで将棋が指せるんだ。こっちが俺ね」

先手のpittapittaが僕。

「あの……先生、2920点……ですか？」

「そう。まあ、この辺はだいたいプロだろうね」

後手のkatto-01も2913点ある。誰かは知らないが、プロの誰かだろう。

挨拶をすませ、初手を指す。全てマウスだけで操作できる。

「こうやって対局するんだ。同じぐらいの点の人なら、15点ぐらい移動する。最高でも30点までしか移動しない。わかった？」

「何となくわかりました……ただ」

「ん？」

「その矢印は、どうして動いているんですか？」

「え？えーこれはね、このマウスを動かすと……」

「マウスってどれですか」

「……わかった。パソコン講座から始めよう」

「……すみません」

結局、一日目午前はパソコン講座に費やされてしまった。月子さんはパソコンを触るのも初めてで、キーボードやショートカットという言葉から教えなければならなかった。そしてその中でわかったのだが、月子さんは中学校にもあまり行っていなかったようだ。今ではだいたいの学校にパソコンがあり、授業で使い方を教えるものだ。しかし月子さんは、何も知らない。

「毎日どうしてたの」

「……私……」

「言いたくない？」

「……私、不登校だったんです。最初は午後になるときつくて……。だんだん午前から保健室に行くようになって、学校にも行かなくなって……。どうせ家にいるんなら、仕事を手伝って言われて……」

「そっか」

月子さんはコミュニケーション自体が苦手そうだと思っていたが、その原因の一つが分かった気がした。元々苦手だったのだろうが、それを何とかしてやろうとした人がいなかったのだろう。ずっと家にいて、親の言いなりになって、他の人と関わらなかった。せっかく将棋が強いのに、全集ばかり読んでいた。

「強くなるには、人と関わる必要があるよ」

「……え」

「勝負は盤上だけじゃないんだ。手つきとか、指し手の早さとか、呟きとか、水分補給のペースとか。そういうことから色々読み取れるようになって、初めて勝負師になれるんだ」

「……私……そういうの苦手です」

「やるしかないよ」

偉そうに言っているが、僕も苦手だ。どちらかと言うと、うまいこと読み取られている方だろう。だからこそ、月子さんにはそれを乗り越えてほしい。

「まあ、そんなこと言ってネット将棋から始めるわけだけどね。最初は、いろんな将棋を経験することが大事。他のことは、まあ追々」

「はい」

昼食は二人で作った。何となくいつも通り朝食は抜いてしまったが、月子さんは何も言わなかったの、金本家も朝食はなかったのかもしれない。月子さんは米を研ぐのはうまかったが、包丁の使い方は危なっかしかった。野菜炒めと簡単なスープを食べた。

昨日は慌ただしかったので気が付かなかったが、この家でテーブルに向かい合ってご飯を食べるというのは本当に久しぶりだ。かつて目の前にいた人を思い出し、少し胸が痛くなる。

午後はいよいよ実戦である。パソコンにはまだ慣れていないようだが、とにかく今はネット道場にログインして、将棋を指すだけのことができればいいのだ。

「まずは名前を作らないと」

「……えーと」

「いや、あのね……」

月子さんはハンドルネームの欄に「Kanemoto Tsukiko」と打ちこんでいた。

「……何か問題が……」

「本名がまるわかりだとちょっと。奨励会に入ってからでも使いたいし」

「そうなんですか」

「うーん、なんかこう、好きなものとか組み合わせてみて」

月子さんは首をひねって考えていたが、しばらくしてから「TomatoMama」と打ちこんだ。

「どういう意味？」

「……トマトとお母さんが好きだから」

「まあ、それでいいや」

とにかくハンドルネームを作り、レーティング対局室に入場することができた。最初は2000点から始めることにした。これはだいたいアマ四段くらいの点数と言われていて、今の月子さんならば過大申告ということはまずないだろう。

「えっと……ここからどうするんでしたっけ」

「持ち時間を選んで待つんだ。いっぱい指せるように、『早指待』にしよう」

「はい」

昼間は人が少ないので、すぐに挑戦者が現れるというわけではない。

「来ないね。こちらから挑戦しよう」

「どの人にすればいいんですか」

「だいたい前後百点以内の人と指すからね。その、UMAMANIAって人にしよう」

「はい」

月子さんが挑戦したのは、2078点の人だった。TomatoMamaが先手になり、挨拶を済ませ対局が始まる。

「あの……」

「どうしたの。助言はしないよ」

「盤が……変な感じです」

「……ん？」

最初、月子さんの言わんとしていることの意味がわからなかった。しかし、月子さんがデスクトップの角度を一所懸命調整しようとしているのを見て、納得した。

普通、将棋は見下ろして対局する。そのため、当たり前だが、相手陣になるほど遠く見える。しかしパソコンの画面は縦向きであるため、相手陣が上で自陣が下側になる。月子さんはその風景に戸惑っているようなのだ。

「これ……倒せませんか」

「残念ながらそういうわけには……慣れるしかないね。最近ではネットの公式棋戦とか指導対局もあるし、プロになるには必要なことだよ」

「……わかりました」

月子さんは下からのぞきこむようにして、何とか対局を続けた。将棋自体は相手の四間飛車に対して急戦がうまく決まり、問題なく勝ちそうだった。この戦法は、小川名人が得意としていたものだ。まあ、教科書が一つしかなかったのだから、当然小川流しか指せないのだが。

「あ」

月子さんの駒が完全に相手を抑え込んでいき、嫌になったのか中盤のうちに相手は投了した。終わりの「ありがとうございました」のあいさつを終え、すぐに相手は去って行った。

「うん、まあここらへんはすぐかな」

あきらかに実力が違う、という感じだった。それではなくてはプロなど目指せないというものだが。

「今ので14点だね。この調子で2400までだ」

「はい。頑張ります」

この後二局指したが、どちらも快勝だった。月子さんの点数は2046点まで上がった。

「まあ、もうちょっとしたら苦戦するようになるよ」

「……あの……」

「ん、どうした」

「この人たち、父より……」

「まあ、どうでもいいじゃないか」

2000点というのはアマではかなり強い方ではあるが、県代表クラスというわけではない。ほとんどの人は六段など持っていないだろう。

「君はお父さんよりはるかに強くなるんだろ」

「……はい」

金本のおじさんは、六段の実力などないのだ。四段も怪しい。月子さんにとって、それがわかってしまうのは悲しいことだろう。

しかし、現実を見なくてはいけない。

「将棋に関しては、上だけを見るんだ」

「……はい」

月子さんは、これから多くのものを見なくてはいけなくなる。汚いものも、無意味なものも。



ぎこちないながらも、二人の暮らしは確立されていった。

食事を作るのは当番制で、主に朝食が月子さん、それ以外が僕だ。以前はコンビニ弁当なども多かったが、食費節約のため自炊するようにした、というのは月子さんには内緒だ。

大変なのは着替えや風呂である。朝、七時の目覚ましで二人とも起きる。そして僕は風呂へ。その間に月子さんが着替え、僕もシャワーを浴びた後そのまま着替える。夜は月子さんがシャワーに行くと、僕は散歩に出かける。恋人でもない女の子がうちでシャワーを浴びている状況は、どうにも落ち着かないのだ。

テレビはほとんどつけなくなったし、コンポもほとんどがオフのままだ。四六時中将棋の勉強というわけではないが、お互いに邪魔になることはしない、というのが暗黙の了解になっている気がする。

一週間もすると、この生活にも慣れてきた。少し楽しくなった気さえするのは、一人きりの生活に疲れていたのかもしれない。ただ、八日目の夜、食事をしながらついに月子さんは当然の疑問を口にした。

「あの……先生の対局っていつなんですか」

僕はしばらく、瞬きを繰り返した。自分にとっては当たり前のことになっているが、世間から見ればあまりにも休みが多いというのが実情だろう。負けている棋士は、ともすると一ヶ月以上対局がないのだ。

けれども僕は。

「……今回はちょっと間が空いてね。ちょうど明日、あるんだ」

しょうもない嘘をついてしまった。本当は来週までない。弱いプロであるということを知られたくないということもあったし、ただ単に見栄を張りたかっただけというものもある。

「そうなんですか。頑張ってください」

「ああ」

そんなわけで、次の日は朝から出かけなくてはならなくなってしまった。月子さんは精いっぱい笑顔で、「いってらっしゃい」と言って僕を見送った。胸の真ん中あたりが、ずきずきと痛んだ。

普段からほとんど家にいるので、四年もいるのに東京のことをあまり知らない。買い物もしないし、遊びに行くこともない。とりあえず足は駅に向いているが、全く行くあてがなかった。

気が付くと、一番慣れ親しんだ路線に乗り、いつもの駅で降りていた。ここまできたらもう、あそこに向かうしかない。僕らの職場、将棋会館に。

対局を装って出てきたので、本当の対局者たちがちょうど入っていくところだった。そういえば今日はC級一組の対局日だ。他にも二次予選や女流の対局などもあり、会館の中は息苦しいほどだった。

「あれ、三東君今日対局あったっけ」

「いや、勉強に」

「珍しいねえ」

プロになってから、対局も指導もないのに会館に来たのは初めてかもしれない。対局以外の仕事すら少ないので、多くの人が僕がいることに驚いている。僕だって来るつもりなんかなかったのだ。とりあえず、控室に行く。観戦記担当者やネット配信係の人が、忙しくいろいろと準備していた。

「おはようございます」

「おはようございま……三東君、どうしたの」

僕は勉強に来ないという都市伝説でもあるのか、観戦記者まで目を丸くしている。

「いや、ちょっと勉強しようかと。一度くらい、活躍したいですからね」

「そうかあ、じゃあ、いいコメント頼むよ。東京は控室が静かなことも多くてね」

たまに出入りはあるものの、対局がないプロは僕だけのようだった。こうなると僕の発言がネット解説に採用される確率が非常に高くなってしまう。

どうせ午前中はあまり指し手も進まない。ちょっとした雑談や戦型の解説などをして、十一時過ぎには控室を出た。なんとなく、昼食休憩になる前に控室を開けるのが礼儀と思ったからだ。

会館を出て、ぶらぶらと歩く。別に戻らなければならないこともないが、相変わらず行き先も思いつかない。ふと見上げると、高くそびえる緑色のネットがあった。いつの間にか、野球場横のゴルフ練習場まで来てしまったようだ。そういえば、このレストランでサンドウィッチを食べると強くなれると聞いたことがある。

ふらふらと、店に入ってしまった。普段そんなものは信じないのだが、今日はちょっとすがってみたい気分になった。

一人でいることが多いのに、一人で食べることが苦手だ。サンドウィッチが出てくるまでの間、ずっと意味もなく携帯を眺めていた。待ちうけになっている近所の猫が、こちらを睨んでいる。

サンドウィッチがきて一口食べたとき、月子さんのことを思い出した。毎日三食一緒だったので、変な気分だ。月子さんも、一人の食事に戸惑うだろうか。それとも、食べるのも忘れて将棋に打ち込んでいるだろうか。

嘘をついて外出して、ぼんやりと昼食を食べている。なんか駄目な父親みたいだ、そう思った。金本のおじさんもこんな感じなのだろうか。それとも、真面目にやっても駄目な人なのだろうか。

耳の奥で、あの時の声が蘇る。「戦わなくなったから、もう追いかけれない」

そして、彼女は去った。

そう、僕は今日も逃げ出している。月子さんから、そして控室から。

食べているものの味が分からなくなった。思い出すこと全てが、後ろ向きだ。

僕は字がうまかった。けれどもみんなそのことを知らなくて、習字で賞をもらった時、クラスが騒然となった。

僕はバスケがうまかった。けれどもみんなそのことを知らなくて、体育の時間、クラスが騒然となった。

だから、僕が将棋が強いなんてことも、誰も知らなかった。僕が将棋の用事で休んだ時、みんなが嘘だと思ったらいい。

ただ彼女だけが、僕のことを知っていて、信じてくれた。だから、頑張れた。降級もしたし、三段リーグで負けが込んだこともあった。それでも僕がプロになれることを信じてくれる人がいたから、僕は強くなろうと思った。

自分のためではなく。

プロになった僕は、もう無理がきかなくなっていた。認められたい、そんな思いが僕を将棋に向かわせていた。けれども気が付くと、僕のことを知る人は将棋関係者ばかりになっていた。本当の僕を知らない人たちは、僕とは関係ない人たちになっていた。

目標のなくなった僕は、近年まれにみる弱い若手になってしまった。そんな僕に愛想を尽かし彼女も去ってしまい、さらに僕の意欲はなくなってしまう。

もう、いいと思っていたのだ。先輩にあきれられようが、後輩に笑われようが、僕はプロとして生きていける。名誉も金もなくても、地位だけを守れさえすれば。

それなのに、月子さんのせいで。あんなにも純粋な思いで、そのくせ金のために強くなりたいと願う姿に、僕の心は常に揺さぶられてしまう。何とかしてやりたいという思いは日々大きくなるのだが、それとともに自分のふがいなさを実感してしまう。月子さんが来て以来大きく生活が変わったという事実は、僕がいかにいい加減な日々を送ってきたかということを示している。将棋にあてる時間は少なく、夜更かしばかりして、食事も適当で。勉強して強くなるとは限らないが、こんなじゃ弱いのは当たり前だ。

僕が会館に現われたただで驚かれたのも、単に珍しいから、というだけではないのだろう。本当に真剣に強くなろうとしている人たちは、僕の意識が低いこともお見通しなのだ。そんな僕が、何をしに来たのだろう、と思っているに違いない。

何とかしなければ、本当に駄目な人間になってしまう。そう思うのに、店を出た僕の足は会館に向かわなかった。怖かった。大事な局面での意見を求められることが、控室にいる他の誰かが、僕の気付かない手を発見することが。僕より若い子が、僕の上のクラスで勝ち誇る姿を見ることが。

あてもなく電車に乗り、乗り換えて、戻って、ホームでボーっとして、また乗った。いつの間にか窓の外が暗くなっていた。そろそろ帰ってもいい頃か、と思った。



「ただいま」

「どうでした？」

玄関を開けると、月子さんが駆け寄ってきた。今までで一番素早い動きだった。

「あ、ああ。勝ったよ」

「おめでとうございます！」

「お、おう」

月子さんは今度はパソコンのところまで駆け戻り、ディスプレイを指さして言った。

「2200になりました」

「おお」

最近はずいぶん負けるようになってきたが、思ったよりも早く点数が上がっていた。慣れない戦法についてもよく質問してくるし、本気でプロになりたい気持ちがよく伝わってくる。

「まあ、ここからが大変かもしれないね」

「はい。でも私、将棋が楽しくなってきました」

「……そうか。それはよかった」

月子さんの笑顔が、僕を苦しめた。それでも僕は、笑顔を作った。

「一度、普通の対局もしてみよう。慣れておかないといけないから」

「はい」

「なんか、疲れたから寝るよ」

「……プロの対局って、やっぱり凄い体力使うんですね」

「……ああ。おやすみ」

服も着替えずに、僕は布団にもぐりこんだ。疲れていたのは事実だ。心のすりきれる音が聞こえてきそうなほどだった



そして、本当の久々の対局は負けた。

これで順位戦は2勝4敗。降級点を心配しなくてはならない成績だ。

負けて、感想戦を終えて、終電がなくて。一番居心地の悪い時間だ。月子さんはもうとっくに寝ているだろうし、早く帰らなくちゃいけない理由なんてない。それでも飲みの誘いを、ふわふわとした理由で断る。

本当は、飲みたい。けれども、みんなと行くのは苦手だ。今日の将棋のことを振り返ったり、今後の目標を述べたり、先輩に奮起を促されたり、どれもが苦手だ。

タクシーに乗る気にもならず、会館を出て、徒歩で家に向かう。空を見上げるが、星なんて見えやしない。吸い込んだ空気が肺の中で鉛になっていくような錯覚に陥る。

「あれ、三東君じゃないか」

後ろから声を掛けられ、振り返ると背の高いおじさんがいた。よく見ると、水田六段だった。同じC級二組に所属しており、僕と同じで対局の帰りなのだろう。

「君も歩いて帰るところ？」

「ええ、まあ……」

「そうだよねえ。負けるとタクシー乗る気にはならないよねえ。本当は終電までに終わりたいけど、なんやかんやで粘っちゃうんだよねえ」

「そうですね」

水田六段は、特に目立たないベテランの先生で、体格はいいのにいつもペコペコしているイメージがある。確か、順位戦で勝ち越したことがないのに降級点を持っていない唯一のベテランだった気がする。

「嫁がね、待ってるんだよ。何時になっても。将棋のことをよく知らなくてね、俺のことまだ強いと勘違いしてんだ。そのうちタイトル取れますよねえ、だって。いやんなっちゃうよ」

「それは……プレッシャーですね」

「いやいや、もちろん聞き流してるよ。俺が頑張るのはね、息子の授業料とか、娘のピアノのレッスン代とか、そういうもののことを考えてね。せめて子供たちが一人前になるまでは緊張の糸が切れないように、そればかりだよ」

「そういうものですか」

「家族を持つと分かるよ。名誉よりもお金。これが原動力」

先輩もそういうものだったんですか、という言葉は飲み込んだ。僕にはお金すら原動力になっていないのだ。

「あ、俺はこっちなんで。また」

「はい。それでは」

水田六段は、交差点で北に曲がった。僕は信号を待つ間、何となくその背中を眺めていた。辛い競争を勝ち抜いてきても、プロの世界ではその他大勢になってしまう人ばかりだ。対局した棋譜がどこにも載らないこともざらで、いったい何のために将棋を指しているのか疑問になることもある。それでも歳をとり、家庭を持つととにかく与えられた勝負を指すしかなくなるのだ。

水田六段を笑うことなどできない。憐れむことも、同情することもない。勝負の世界においては、敗者の存在も必要なのだ。敗者が必死になればなるほど、勝者が輝くのだ。僕も、主役になれないことは身に染みてわかっている。せめて、注目されるような脇役になれば。

素面で歩くと、鮮明に余計なことを考えてしまう。どれぐらい時間がたったかわからないが、我が家の玄関の前まで帰ってきた。扉を開けると、電気が点いていた。

「起きてるの？」

「……先生。勝ちましたか」

「……負けたよ」

「……それは……残念でした……」

聞こえてくる声は、震えていた。月子さんはテーブルの前で、がっくりと頭を垂れていた。

「どうしたの」

「.....これ.....」

月子さんは僕に、封筒を差し出した。宛名には、「金本光男様」と書かれている。

「返ってきた」

「え」

「前に出したのに返事がないから、もう一回出したんです。そしたら.....」

「転居先不明.....」

よく見ると、赤い印が押されていた。引っ越してしまったうえに、転居先を届けていないということになる。

「私に何も知らせないで.....」

「まあ、そのうち連絡が来るさ」

そうは思わなかった。娘を預けたタイミングで転居。多額の借金。

「.....私、どうしていいか.....」

「とにかく、待つしかないよ。さあ、寝よう。明日も七時起きだぞ」

「.....。.....はい」

月子さんは、よぼよぼとした足取りでロフトに上がって行った。僕は色々なものを洗い流すため、シャワーを浴びた。

全部さっぱりとは行かなかったが、いくぶん気分は良くなった。このまま眠ってしまえば、嫌なことのうちのいくつかは忘れてしまうだろう。

しかし、僕は布団に入ることができなかった。斜め上から、すすり泣く声が聞こえてくる。

「月子さん？」

返事はない。梯子を上がっていくと、瞼を閉じ、毛布を抱きしめる少女の姿があった。

「.....お母さん.....お母さん.....」

うわごとのような呟き。もう心は夢の中なのだろうか。十五歳が等身大の姿で、苦しみを耐え忍んでいた。

僕は、そっと髪をなでた。すると月子さんは右手を伸ばして、僕の手をつかんだ。母のことは呼び続けたまま。

僕は動けなくなってしまった。今、この子が頼れるのは僕しかいない。月子さんにとって僕は、師匠であり父親であり、そして母親でもあるのだ。

あの時僕が追い返していたら、月子さんはどうなっていただろうか。彼女の両親は、娘を追い出したかっただけなのだろうか。

洗い流したところへ、別のものがこびりつき始めた。月子さんが寝息を立て始めたのを確認して、僕はビールを取りに行った。



「.....ひやおー」

車窓から流れていく風景に、月子さんは珍妙な感嘆の声を漏らした。

今二人は、新幹線に乗っている。電車すらほとんど乗ったことのない月子さんにとって、このスピードはとても刺激が強いようだ。

僕らの目的地は、地方のとある道場。ネットではいい調子で点数を上げている月子さんだったが、やはり向かい合っただけの対局をこなしておく必要があった。駒をつかむこと、時計を押すこと、相手の様子をうかがうこと。対局には様々な技術が必要だ。

とはいえ、奨励会受験前にあまり目立ちたくはなかった。ただでさえ内気な子なので、あまり注目されてしまうのはよくないと思う。それに僕が師匠であることや、東京に単身出てきていることなどは、できるだけ長く隠しておきたいのだ。

新幹線を降り、バスに乗る。二十分ほど揺られて、海の近くの停留所で降りた。風が穏やかに吹きつけてくる。

「久しぶりに海を見ました」

月子さんは、しばらく立ち止まって風景を眺めていた。彼女には、ゆっくりとできる瞬間は少ない。

「行こう」

「はい」

そこから歩いて約五分。白い壁に青い瓦、目的の将棋道場に到着した。中に入ると、すでにおじさんたちでいっぱいだった。足の長い分厚い盤を使って、十秒将棋などを楽しんでいる。

「お久しぶり」

「おおっ、幸典。本当に久しぶりだなあ」

玄関から入ってすぐ、右手の机の前で手を振る男性。長い顎に大きな眼鼻で、一度見たらなかなか忘れられない顔だ。

「すごい人だね」

「まあ、これでも減ったよ。爺さんの頃は入りきれないぐらいだったらしい」

「へー。あ、恒義、この子が金本月子さん。今日のトーナメントに参加するから」

「あ、あの、よろしくお願いします」

「おー、若いねえ。俺は北森恒義。まあ一応ここの責任者。おっさんたちが失礼なこと言ったら追い出してやるから、伝えてね」

「は、はい」

恒義は不細工な顔を出来るだけ朗らかにして笑いかけていた。しかし月子さんは、人の多さに圧倒されてしまっているようだ。愛想笑いすらできずに、きょろきょろと視線をさまよわせている。

「Aクラスでいいの」

「いいと思うけどね」

「幸典も出たら。優勝逃して恥かいてよ」

「やだよ」

僕らの会話を聞いてか、何人かがこちらに近寄ってきた。

「あの……三東先生ですか？」

「あ、はい」

「いやあ、本物のプロの先生が来られるなんて」

「……伊藤さん、どーゆー意味ですか」

「ああ、これは失礼」

恒義は本気で怒っているわけではなく、苦笑いを浮かべながらトーナメント表を準備し始めた。

「みんな、俺のこと偽物だと思ってんだよなあ。まあ、仕方ないか」

僕はどういう言葉を返せばいいかわからず、曖昧にうなずいた。

恒義は奨励会の同期で、僕が唯一気兼ねなく話ができる将棋関係者だった。恒義は勝負師らしい厳しさや破天荒さといったものとは無縁で、普通っぽいということで将棋の世界では浮いていた。それでも僕よりはかなり強く、僕が3級するときには初段になっていた。その頃の僕は色々な自信をなくし、恒義は四段になれるだろうけど、自分は違う、そう思った。けれども、実際は逆になった。先に三段リーグに入った恒義は、僕がそこにたどり着く前に奨励会を辞めてしまった。「こんなところでもたもたしてるようじゃ、タイトルは取れない」と言って、恒義は故郷に戻り祖父の道場を継いだのだ。

「今でも幸典よりは強いと思うんだけどなあ」

「失礼な」

それは、本当かもしれないのだ。タイトル云々は別にして、恒義は三段リーグを抜ければ強い方のプロになれる素質があった。退会後も将棋に関わっていたことを考えれば、僕より強いなんてことは十分にあり得る話だ。

「もしよかったらさ、指導対局とかしてくれよ。金本さんの分ただにするからさ」

「入場料600円だろ。俺の指導、どんだけ安いんだよ」

そうは言っても、最初からそのつもりだった。普及も大事なプロも役目だし、なにより他にすることがない。

「えー、本日は三東四段が指導対局をしてくれるので、負けても損しません」

しばらくして、トーナメントが始まった。この道場では休日に将棋大会を開いており、今日はA・B級に分かれたトーナメント戦が行われる。各クラスで優勝すると、海の幸がもらえる。

月子さんはおどおどしていたが、名前を呼ばれ盤の前に座ると少し落ち着いたようだった。

B級でシードが一つできたので、空き番の人を二枚落ちで指導することになった。月子さんのことは気になるが、放っておくのも本人のためというものだ。

しばらくすると月子さんの対戦相手から「あちゃー」という悲鳴が上がった。今まで何度も見てきたが、幼い子供、女の子などに負けるとおじさんは照れ隠しに声を出すようだ。

恒義がトーナメント表に結果を書き込む。二十分もかからず、月子さんは準決勝進出を決めた。

負けた人たちがぞろぞろとこちらにやってくる。世の中には百面指しをこなす先生もいるが、僕は選べる時は三面指しまでと決めている。勝たせることを大事だという考え方もあるが、勝ったことが過信になってしまう人も多いので、できるだけためになるように負かしてあげたいのだ。見せ場を作りながら一手差で勝つ、この技術はプロ特有のものである。

一時間ほどすると今度は、「おお」という声が湧きあがった。月子さんの対局相手が頭を下げているのが見えた。またまた勝ったようだ。

「強いね、あの子」

僕の傍らまで来て、恒義は唸っている。

「プロを目指すんだ。勝ってもらわなきゃ」

「……まさか、お前が師匠なのか」

「そうなりそうだ」

「そっか。お前が弟子を持つのか。なんか、本当にプロになったんだな」

恒義は、僕の肩をポンポンと叩いた。その顔は、少し寂しそうだった。僕も、少し切なくなった。

月子さんの方は、対戦相手が決まるのをじっと待っていた。もう一つの対局を見るでもなく、瞑想するでもなく。ひょっとしたら、貧乏な生活の中でうまく「何もしない」ことを身につけたのかもしれない。プロになると、それは大事だ。長い持ち時間、ずっと考え続けることなどできない。いかに疲れないように時間を浪費するか、それも技術の内である。本当に強い人はどれだけでも考え続けることができているのかもしれないが、なったことがないのでわからない。

「あー、やっぱ飯原さんか」

「こりゃ見ものだ」

もう一つの準決勝も終わったようだ。そして、その結果は予想通りだった。勝った飯原さんは、正真正銘のアマ六段、何回も県代表になったことのある強豪だ。全体的にバランスのいい将棋で、無理をしない勝ち方が多い。実はアマ時代、一度対戦して負けている。

指導対局もだいたい一周し、皆の関心も決勝戦へと移っていった。道場一のベテランと、突然現れた少女の決戦は、確かに興味をそそられるものだろう。僕も、決勝戦は観戦することにした。

持ち時間は20分、切れたら一手30秒の秒読み。時間に関してはネット対局の成果が試されるところだ。そして、ここからが本番とも言える。これまでの相手は普通にやれば勝てる実力

差だった。しかし、飯原さんは別だ。基本ができているうえに、これまでの経験値が半端ではない。注目される中、月子さんはどれくらい実力を出し切れるだろうか。

飯原さんが駒を振り、先手になった。

「ではお願いします」

「……よろしくお願いします」

二人が挨拶して、対局が始まった。すらすらと相矢倉に組みあがっていった。矢倉は将棋の純文学とも言われる、最も基本的な戦法の一つだ。守りは金銀三枚、攻めは飛車角銀桂という格言にもぴったり当てはまる。

少しやばいかな、とも思った。矢倉は指す人も多いだけに、研究も随分と進んでいる。小川名人の時代からは、かなり進歩しているのだ。

二人とも小刻みに時間を使い、知識を確認しながら指しているようだ。組みあがるまでは、問題がない。仕掛けてからが、どうなるかだ。もしくは、仕掛けなかったときに。

飯原さんは、右手を顎に当てて次の手を考え始めた。そして、二分ほどして右手は左端に伸びた。9八香。穴熊に囲い、さらに白玉を固くしようという作戦だ。最近になって現れた指し方で、後手が飛車先の歩を突いているときにはこうなることが多い。

月子さんの額に、縦の皺が刻まれる。予想していなかったのだろう。瞼を閉じ、頭の中の盤で考えているようだ。後手は右の銀も守りに使っており、右の桂馬はすぐには跳ねられない。仕掛ける手はないが、相手は攻めてこない。このような時に、損にならない手を指すテクニックもプロになるには必要だ。もちろんちゃんと最新の情報を入手していれば、ただそれをなぞるだけでももう少し先まで行けるのだが。

時間がどんどん過ぎて行き、ついに秒読みに突入した。十秒過ぎ、二十秒過ぎ。そして、時間ぎりぎりまで角が一つ、右斜め上に動かされた。6四角。月子さんは、自力で定跡の一手にたどり着いた。

飯原さんはさほど時間をかけず6五歩。月子さんは7三角。相手に歩を突かせただけのようだが、争点を作るための高等戦術だ。この短い時間の中でこの手順にたどり着いたというのは、相当のセンスを感じる。

ただし、中盤で定跡通りに進んだからと言って、有利になるわけではない。穴熊に囲った先手はついに総攻撃を仕掛けてくる。後手はそれをぎりぎり何とか受け続けなければならないのだ。後手の勝ち方は三つ、完全に受け切って先手の攻めを切らせるか、もらった駒で一気に反撃するか、もしくはすると玉が相手陣に入っていくかだ。

月子さんは、そのどれを選ぶのかが定まっていなかった様子だった。ある手には受け、ある手には手抜き、ある手には逃げ。一つ一つはそれほど悪い手ではないが、一貫性はない。そしてベテランは、そんな相手の様子を見逃してくれない。

ゆっくりと放たれた、2五桂馬の王手。相手の歩の頭であり、どう見ても只だ。しかしそれを取ると、同銀で全軍躍動、とても受け切ることはできない。かといって逃げると、上からじわじわと押しつぶされて駄目だろう。先手は穴熊、王手がかからない。つまりそれは、攻めれば必ず駒を渡すことを意味する。これ以上相手に駒を渡せば、確実に攻め切られる。

月子さんの瞳から、少し光が失われたように見える。そして、力なく歩で桂馬を取った。相手が間違えるのをひたすら待つ、辛い指し方だ。そして、矢倉に慣れている飯原さんは、もう間違えない。20手ほど続いたが、逆転の筋はなかった。

「負けました」

月子さんが頭を下げ、髪の毛が盤に覆いかぶさった。今度からは結ばせた方がいいかな、そんなことを思った。月子さんが負けたことについては特に何も感じなかった。結果は、僕の予想通りだったのだ。

たっぴりと感想戦をして、そのあとに月子さんは小さな準優勝の賞状をもらった。日帰りの旅なので、そこでお暇することになった。

「今日はありがとう」

「いやいやこちらこそ。またいつでも来いよ」

帰り道、何度振り返っても恒義は手を振っていた。月子さんはうつむいたままだった。

「どうだった」

「.....強かった.....です」

「そうだろう。でも、奨励会員はあの人より強いぞ」

「.....まだまだ、先なんですね.....」

「まだまだ、伸びる年だ。月子さん、君は僕が15歳の時より強いよ。ただ、色々なことを知らないだけなんだ」

「.....頑張ります。もっと強くなれるように.....」

新幹線に乗ると月子さんは、電池が切れたかのようにぐっすりと寝始めた。人と指すこと以前に、人に囲まれることに疲れてしまったようだ。プロになるためには、将棋以外にも本当にいろいろと乗り越えなければならないことがあるのだ。



遠征の日以来、月子さんは自主的に最近の棋譜を並べるようになった。ネット上にあるものや、僕がコピーしてきたもの、そして年鑑に載っているもの。気になった棋譜はノートに書き写し、詳細にコメントを付けている。さらに僕の持っていた定跡書や詰め将棋の本も積極的に読むようになった。どうやら、将棋の楽しさと同時に、悔しさも本格的に感じ始めているようだった。

一方の僕は、前半であまりにも負けが込んだために、順位戦以外の対局がほとんどないという状況に陥っていた。一ヶ月に二回、会館での将棋教室の講師の仕事があるので、ほぼ月に三日働いているという状況だ。相変わらず時折、対局があると嘘をついて家を出ていく。最近では暇つぶしにいいスポットをたくさん見つけるという、なんとも情けない有様である。

月子さんが日に日に強くなっていく姿を見て、僕も頑張らなければ、とは思うのだ。けれども、一步を踏み出しても、いつも同じところに戻ってきてしまう。いっぱい研究して、将棋も指して、気合を入れて対局に臨んでも、いつも通りの負けられ方をして帰ってくる。そして、こんな感じでも生きていけるじゃないか、と思ってしまう。たとえ勝率三割台でも、降級点を取らないようにして、順位戦で生き残っていればプロでいられる。贅沢はできないけど、今だって弟子と一緒に生活していけるぐらいの収入はある。

僕は、タイトルを取りたいとか、A級に上がりたいとか、そういう具体的な目標を持ったことがなかった。ただ自分がプロになれることを、証明したかった。子供心にそう思って出発してしまったら、それしか選べない大人になっていた。

僕が手に入れたものはなんだったんだろう、と思う。プロになれない人もいるから、プロであることはきっと誇ってもいいことなんだろう。けれども、子供の僕が望んでいたほど大きな充実感、全く得ることができなかった。それどころか、唯一僕が手に入れたすばらしいものは、プロになった後に失ってしまった。

月子さんがもしプロになれたとしても、同じような思いをするかもしれない。弱いプロでは、借金を返すことはできないだろうから。プロを目指す子に対する本当の優しさは、プロになんてなるなって言ってあげることかもしれない。

「やった！」

僕のぐだぐだした思考を強制的に遮断するかのように、月子さんがいつになく元気な声で叫んだ。

「どうしたの」

「ついに、2400点です！」

僕はテーブルを半周して、月子さんの後ろからパソコンの画面を覗き込んだ。確かに、TomatoMamaの点数は2403点になっていた。

「おめでとう」

「……先生」

月子さんは炬燵から出て、僕の方を向いて正座をした。そして、深々と頭を下げた。

「私を、正式に弟子にしてください」

「ああ、約束だからね」

「.....ありがとうございます.....早く強くなって、先生に借りたお金もお返しします」

「待ってるよ」

月子さんの瞳から、小さなしずくがこぼれ落ちていた。考えてみると僕は、そういう涙を流したことがなかった。



「幸典」

突然声を掛けられて、僕は足を止めた。それは、聞き覚えのある声だった。

「あ……朱里……」

僕は、完全に気を抜いていた。なにせ、このホームセンターは僕の暇つぶしスポットのひとつなのだ。とくに何を買うわけでもないが、お金をあればこれ買えるなー、と考えながら見て回るのが楽しい。そんな癒しの時間がまさか、こんな形で乱されるなんて。

「久しぶり。びっくりした？」

「あ、ああ。まだ東京にいたんだ」

「帰っても仕事ないしね。こっちの方が楽しいし」

「……ここで働いてるの」

「うん。先週から」

目の前にいるちっちゃくて愛らしい顔の女性は、僕の高校の同級生であり、元恋人でもある工藤朱里だった。ずっと僕のことを応援してくれ、東京と一緒に出てきてくれて、そして愛想を尽かして去って行った。

「調子はどう？ 相変わらず負けてる？」

「……ああ。急に強くはならないよ」

「また言い訳。変わんないなあ」

早く逃げ出してしまいたかった。朱里には嘘をついても無駄だから、本当のことを言うしかない。本当のことを言うのは、辛い。

「頑張ってるよ。結果が出ないんだ」

「そう。でもなんか、前よりはいい顔つきしてるかも。まあ、応援してるよ。じゃ、仕事あるから」

「ああ、じゃあ」

後ろ姿の朱里を見ながら、ほっとすると同時に悲しくもなった。こんなに近くにいたのに、僕は何も知らなかった。彼女は何も知らせてくれなかった。僕らは、友達に戻ることもできなかったのだ。

彼女は、前向きな僕が好きだった。どんなに周りから評価されていなくても、朱里だけは僕を信じてくれた。けれども僕は、プロになることで歩みを止めてしまった。僕にとっては、そこがゴールだった。朱里にとっては、それが許せなかった。

ほんの少しの時間だったけれど、彼女は今でも素敵だった。最初から僕になんか釣り合わない人だったのだ。

気が付くと、強く拳を握りしめていた。やるせない気持ちが爆発して、気がつくはずと欲しかったラックを購入してしまっていた。

本当に駄目だ。



朝五時に目が覚めた。

今日は運命の日だった。僕にとっての、ではない。にもかかわらず、眠りは常に浅く、いつになく早く起きてしまった。

ロフトの方からは、いつもと変わらない、小さな寝息が聞こえてくる。

布団にもぐりこんだが、頭は冴えわたっている。十分ほどして、あきらめて起き上がった。

とりあえず、コーヒーを飲んだ。

今日は、奨励会試験の日だ。

ついていくわけにもいかないし、教えられることは全て教えた。僕がすべきことなど、何もないのだ。それなのにどうにも落ち着かない。

自分が試験を受けたときのことを思い出す。まだ中学一年生だった僕は、絶対に受かると信じ込んでいた。両親はあまり興味がなさそうだった。将棋のプロというものがまるでわからず、カルチャースクールか専門学校にでも行くかのように思っていたようだ。師匠が直接説明してくれたが、それでもわかっていない様子だった。ただ、僕のすることには何も反対をしなかった。両親にとって僕は何もかもがそこそこの人間であり、たとえ「趣味であろうと」頑張るのであれば喜ばしいと思っていたようだ。

僕はあっさりとして試験に受かったし、両親はいつまでたっても「就職はどうするの」なんて聞いてきた。いまだに僕がどのようにしてお金を稼げているのか、さっぱり想像がつかないらしい。

しばらく何もできずにボーっとしていた。まさか自分のものでない試験に、しかも数か月前までまったく知りもしなかった子のために、こんなに心が乱されるとは思わなかった。本当に心が弱い。僕は、どうにも勝負に向いていない人間だと実感した。

七時前、いつも通りの時間に月子さんは梯子を下りてきた。

「おはようございます」

「おはよう。よく寝れたかい」

「はい。試験中眠くならないよう、しっかり寝ました」

本当にいつも通りの、ふんわりとした感じだった。

「緊張は？」

「うーん。多分対局始まらないと。今はまだ、何にも実感はないです」  
きっと受かる。そう思った。



「三東君」

控室で検討をしていると、突然声をかけられた。振り返ると、そこには夏目七段がいた。がっしりとした体に白髪交じりの髪、とても男らしい。奨励会幹事を努めている、とても真面目で熱い先生だ。

「はい」

「……彼女は、何者なんだね」

「金本のことですか」

「ああ」

夏目七段は、僕の目の前にどっかりと腰を下ろした。話は長くなるかもしれない。

「私が幹事になって、初めての女性でね。まあそれはいい。けれどね、誰も彼女のことを知らないんだよ。対局どころか、見たこともないというんだ。そのくせ、すごく強い。試験の将棋は圧勝だったよ。しかも師匠が君というのは……まあ意外でね。みんな、気になっててね」

何となく予想はしていたが、いざその時になってみるとなんだか気まずい。将棋界は閉鎖的な、狭い社会だ。だから、異質なものにはひどく敏感なのだ。

「金本は故郷が同じで、彼女の父から頼まれたんです。事情があって大会に出ることができなくて、実戦経験は少ないんです」

「ふうむ。まさか現代社会にそんな逸材が隠れているとはねえ」

確かに、最近の子供はどんどん大会に出て、ある程度実績を積んでから奨励会を受験する。みんなを驚かせたというのも、なんとなく、悪い気はしない。僕がどこまで助けられたのかは分からないが、弟子を褒められるというのは嬉しいものだ。

「彼女は注目されるよ。絶対」

「できれば、見守ってあげてほしいです」

「努力はさせてもらうよ」

月子さんが奨励会に入ってから、僕に対する視線も変わったような気がする。これまでは、その他大勢の一人にすぎなかった。成績もいまいちなら、普及も熱心ではない。研究会にも参加せず、グループを作るでもない。そんな無印の僕が、突然得体のしれない弟子を放りこんできたのだ。そりゃびっくりするだろう。

「よろしくお願いします」

「まあ、本人次第だけどね。でもなんか、すごく懐かしい感じの将棋を指すよね。重厚で、ゆったりした……」

「そうですね」

「まあ、君も弟子に負けないように頑張らないと」

「はい」

「ああ、対局の途中なんだ。また今度」

「ではまた」

再び一人残された控室の中で、僕はぼんやりとしていた。僕はいつだって、何をしたらって、注

目されなかった。それが突然、自分の力以外でこうして声をかけられている。

午後からは、講師の仕事だ。それが終わるとまた、十日間仕事がない。……その間は、師匠の仕事に専念できるということだ。



「先生、両親は夜逃げしました」

夕食が終ると、突然月子さんはそんなことを言った。僕には、返す言葉がなかった。

「……隣の人に電話してみたんです。……勝手に電話使ってごめんなさい」

「いや、それはいいけど……」

「なんか、すごく悲しいです。でも、ちょっとだけ安心しました。荷物を持って逃げたってことは、生きようとしていると思うから……」

とても口には出せないが、月子さんにとって何が一番いいことなのか、わからなかった。両親が生きている限り、借金も残っているのだ。

「一度でいいから、家族三人で普通に暮らしたいです……」

「月子さん……頑張れば、できるよ」

「はい」

月子さんの顔には、不安や悲しみ、そういったものが浮かび上がっていた。この四カ月ほど、僕なりに精いっぱいのことをしてきた。けれども僕は、結局は月子さんにとって他人なのだ。たまたま師匠になっただけの人間には、彼女の心を癒してやれるだけの力がなかった。

僕は大人なので、わかってしまう。月子さんの両親は、これ以上娘を支え続けることができなかったのだ。夜逃げに娘を連れていくだけの覚悟がなかったのだ。だから娘の良心に付け込んで、博打のような勝負の世界に放り投げてしまったのだ。

月子さんも大人になっていく。いつ本当のことに気づいたら、どうするだろうか。将棋なんかやめてしまうだろうか。その時僕は何と言うだろうか。何か言えるだろうか。

なんとなく、だけれど。きっと多くの人がベテランになってから弟子を取るのは、子育てで予行演習ができているからなんだ、そう思った。今の僕には、十五歳の少女を導くだけの逞しさはない。共に苦しみながら道を切り開いていくしか、ないのかもしれない。



「おかえり」

「.....」

なんとなく普通にはいかないことは分かっていた。今日は、奨励会の例会の日。月子さんの顔色は予想以上に悪かった。

「どうだった」

「.....辛いです」

「勝てなかったの？」

「.....知らない人というのが、怖いんです.....」

月子さんは腰を下ろすと、テーブルに上半身を委ねた。

「そっか」

大丈夫だよ、とは言えなかった。かつての自分も大丈夫ではなかったから。

「.....私、もう行きたくないと思ってます。駄目ですよね.....」

僕は、月子さんの背中を叩いた。

「そのままじゃ、駄目だね。でも、急に治るもんじゃないよ。僕は、心を閉ざした」

「先生.....」

「まず、勝つことだ。多くの人は、奨励会からいなくなる。友達になる必要はない。無理をしてまでは」

「でも.....」

「君は目立ってる。それは確かだよ。でも、勝つことは目立つことなんだ。ずっと続く。観客がいなくてもましと思わなきゃ」

「.....努力します」

先は長いが、あきらめればすぐに終わってしまう。将棋は強くなる一方でも、心を強くするには時間がかかるだろう。月子さんは、乗り越えていけるだろうか。

全ては彼女次第だ。僕にできることは少しだけ。そして僕は、誰にも助けてもらえなかったが、何とかプロになることができた。

温かい紅茶をいれた。それが、僕に出来ること。



将棋界で一番長い日、と呼ばれる一日がある。A級順位戦最終日のことだ。将棋界において最も強いであろう十人が、名人挑戦、そしてA級残留をかけて戦う。その様子はテレビで中継され、多くの将棋ファンがリアルタイムで見守ることになる。

だが、C級二組の最終日も、同じくらい長いのだ。対局が多い分、ドラマの数はケタ違いである。

僕は結局、二勝七敗でこの日を迎えてしまった。順位も悪いため、降級点回避には勝利と運が必要になっている。

先日、月子さんは4級に昇級した。相変わらず行くこと自体はつらそうだが、実力からして妥当な結果だ。一方の僕は、月子さんがプロになる頃には順位戦から姿を消していそう。そんな情けない事態だけは、絶対に避けたい。

今日の相手は朝田五段。僕より二年先輩で、毎年昇級争いをしている強い若手の一人だ。テレビ棋戦でベスト4に進出したこともある。現在八勝一敗。僕に勝てば文句なく昇級、という状況だ。

朝の喧噪の中で、「朝田君は決まりだな」という声が聞こえてきた。みんな心の中では、そう思っているのだろう。威勢のいい棋士と、勝率三割の棋士。誰が見たって、どちらが有利かはわかるというものだ。

それでも。それでも、このまま降級点を取るわけにはいかないのだ。たとえ大した目標がなくても、落ちていくことだけは嫌だ。順位戦からいなくなれば、また元のその他大勢に逆戻りしてしまう。何のためにプロになったのか、わからなくなってしまう。朝田さんの心に、そしてみんなの記憶に大きな傷を付けたい。

気持ちと高まりとは別に、将棋は淡々と進んでいった。角交換振り飛車のよくある形。流行り始めの頃かもにされまくったので、この戦型に関してはかなり研究した。朝田五段も自信があるのだろう、小刻みに時間は使っているが、考えているというよりは確認しているようだ。

順位戦の時間は、世間と切り離されて進んでいく。ときには驚くほどゆっくりと過ぎるが、難しい局面になると驚くほど速く走り出すこともある。昼食休憩が過ぎ、夕食休憩が過ぎても、室内は静かだった。いつもならば数局が終わっているものだが、今日はまだどこも熱戦が続いているようだ。これだけの人が黙々と将棋を指す。観客はいない。将棋とは何と異様な競技だろうか。

午後七時半。ついに未知の局面に突入した。駒損で攻める振り飛車、争点をずらしながら受ける居飛車。玉頭も戦場になり、非常にややこしいことになってきた。どこかで反撃しなければ、受け切って勝つような将棋ではない。

午後九時。ごちゃごちゃした局面の中に、一筋の光明が見えた。桂馬を二枚捨てる筋で、一気の寄せが狙える。ただ、駒を渡すだけに読み抜けがあったら一気に負けになる。最後の持ち時間を使って、慎重に読んだ。そして、いけると思った。詰みまで読んだ。祈ってもいないのに、神様に感謝すらした。

読み筋通りに進んでいく。朝田五段は相変わらず淡々と指している。まるで、結果は分かっているかというように。

午後十一時。いよいよ、最終盤。あとは、詰ますだけだ。心の震えを抑えるため、小さく息を吐いた。後は作業だ。そう思っていた……

王手の連続に、必然の応手だと思っていた。けれども浅田五段は、そんな僕をあざ笑うかのように、その残酷な一手を指した。

8五同飛不成。しばらくは意味がわからず、そして、愕然とした。なんとこれで、打ち歩詰め

になっているのだ。当たり前のように飛車は成るものと思っていた。盲点にはなる。けれども、プロならば読まなければいけない一手だ。

もう、勝ちない。修正する順も思い浮かばない。けれども、こんな格好のいい一手で終わらせたくはなかった。不成を僕が読んでいなかったことを吹聴するような投了図には、絶対にしたくなかった。結果、棋譜を汚してしまう。僕は、どこまでもプロ失格だった。

午前零時三分。終わった。

朝田五段は昇級し、僕は降級点を取った。完全な勝者と敗者のコントラストが描かれた。



三月の終わり。三東家の食卓には、小さなホールケーキが用意された。今日は、月子さんの十六歳の誕生日だった。

月子さんは目を丸くしてケーキを見ている。喜ぶとかではなくて、得体の知れないものを発見したかのような感じだ。

「ケーキの本体を初めて知りました」

実は僕は甘いものが苦手なので、ケーキはほとんど月子さんが食べた。おいしそうに食べる女の子の顔を見ると、僕の心も少し柔らかくなった。

「月子さん、十六歳の目標は」

「.....初段になります」

「よし。頑張って」

何気ない、やり取りのつもりだった。けれども、月子さんは思いがけないことを言ってきた。

「先生の目標は、なんですか」

「え」

「.....聞いたことなかったから.....。教えてもらえませんか」

まっすぐな瞳で問われて、戸惑う。何と言えればいいのか、考えた。

「.....とりあえずは、五段かな」

「きっと、すぐですね」

月子さんは僕の成績のことがよくわかっていないのだ。昇級でも勝ち星でも、五段はまだ遠い。

僕の心の中に浮かんだ本当の目標は、「せめて勝ち越し」だった。それすら大変な目標だということは、情けないが、真実なのだ。

「来年の今日は、もっといろんなことを祝えるようにしよう」

「はい」

そう。笑われるかもしれないけれど、一分でも勝率五割を超えていたら、僕は僕を祝いたい。そう思わせてくれる弟子に感謝したい。



なんだか、妙な気分だ。

初めて会った日から一年とちょっと。師匠と弟子として一緒に暮らしてきたが、親子のようであり、兄妹のようでもあった。二人とも世間に触れるのが苦手で、家にいるときに安心しているのだと思う。たまにどちらかが仕事で出かけるときはあるが、私用で不在にすることはほとんどない。

そんな二人が今、将棋会館の同じ部屋にいる。

月子さんは、挑戦者決定リーグ戦の記録係だ。持っている中で一番かわいい服を着て、机の前にちょこんと座っている。僕は別のタイトルの一次予選一回戦。

月子さんが、僕の仕事している姿を見るのは今日が初めてだ。すでに他の人から聞いて僕の弱さなど知っているのかもしれない。けれども今日だけは、堂々と勝ちたかった。月子さんの目指す強いプロの幻想を、僕の中にも見てほしかった。

相手は沢崎九段。高級そうなスーツと腕時計が目につくが、今はそんなに儲けていないはずだ。タイトル獲得二期、A級在位四期の立派な先生だが、最近は全く勝てなくなっている。四十六歳とまだ老け込む歳ではないが、無理気味の勢いに任せた攻めは精度が落ちてしまったようだ。

若手は、勝たなければならない相手だ。

とはいえ、相手も僕には勝たなければならないと思っているだろう。

序盤から、沢崎九段は気合十分に突っ張った手を指してきた。相居飛車で乱戦になると、あっという間に勝負どころが来てしまう。若手相手だと、研究にはまらないようにこういう将棋を仕掛けてくるベテランの先生は多い。

僕は、用意していた缶コーヒーを飲み干す。効用はよくわからないが、頭がすっきりしたような気になる。

できるだけ盤面に集中しようと思うのだが、月子さんのことも気になる。今のところそつなくこなしているようだが、この先も大丈夫だろうか。これまでは短い将棋ばかりだったが、今日の対局は遅くまでかかるかもしれない。果たしてそこまで体力が持つだろうか。

僕が長考しているうちに、夕食休憩になった。今日は出前を取ってもらっている。だが、すぐに食べる気にはならず、廊下のソファに座っていた。

「つつこちゃん今度さ、うちの研究会来ない」

どこからか、聞き覚えのある声がする。少し記憶をたどってみたが、すぐには出てこなかった。

「……え……私、そういうのよくわからなくて……」

「いやまあさ、対局したり検討したり、ご飯食べたりゲームしたりするんだ。皆川さんも参加してるしさ、考えといてよ」

「……はい」

皆川さんとは、皆川女流1級のことだろう。それで思い出した。あの声は、最近高校生で四段に上がった辻村君だ。奨励会ではほぼ入れ違いで、しかも声変わりする前だったのでうろ覚えだったのだ。皆川さんは彼の姉弟子になる。

「また詳しいことは連絡するしさ、メアド教えてよ」

「.....メアド.....は.....ないです」

「え、携帯は？」

「.....持ってないです」

「じゃあ電話は？」

「一応.....。先生が出るかもしれませんが」

「.....えっと.....まあいいや、じゃあ電話番号教えてよ。またかけるからさ」

僕は、席を立ちエレベーターに向かった。なんだか、これ以上は聞いていられないと思ったのだ。当たり前だが、月子さんにも彼女だけの人付き合いがある。同世代との関わりも大事だろう。そんなことは頭ではわかるのだが、しかしどうしても違和感を持ってしまうのだ。僕以外と関わる月子さんは、月子さんでないような気がしてしまう。

会館の外に出て、思い切り息を吸った。わけのわからないもやもやを、何とか中和したかった。

空から、雨粒が落ちてきた。ひどく気分が悪くなって、すぐに会館の中に戻った。

味気のない蕎麦をさっさと食べ、盤の前に座った。よく見てみると、自分の方が随分と優勢になっている。何かにとらわれていては、一目でわかることも見えなくなってしまうようだ。たださえ少ない対局を、雑念で落とすわけにはいかない。

長年そうしてきたように僕は、対局室の中で孤独を噛みしめた。しかしあろうことか、朱里のことを思い出してしまった。家に帰ると、僕は孤独ではなかった。.....朱里は孤独だった、そう言ったのだが。

ぐちゃぐちゃした思考が渦巻く中で、対局は再開された。まだ持ち時間は余っていたが、僕は思いつくままに次の手を指していった。形勢は揺れ動いたのかもしれないが、気が付くと相手玉に必至がかかっていた。沢崎九段のつむじが見える。

「負けました」

今までで一番いい勝ち方だ、そう思った。そう思ったかった。

僕らが感想戦を終えても、月子さんのところはまだ終わっていなかった。僕は部屋を出て、そのまま会館も出た。



なんだか、おかしいことになってしまった。

夜中、月子さんはタクシーで帰ってきた。辻村君に送られて。

そして、そういうことに慣れていない月子さんは、何とかお礼をしようと辻村君を家に連れてきた。そして辻村君は、僕の顔を見るなり口をあぐりと開けて固まってしまった。どうせいやらしい期待でもしていたのだろう。

「……本当に……一緒に暮らしていたんですね……」

ようやく出てきたのは、そんな言葉だった。

「色々とおあるんだ。まあ、上がりなさい」

考えてみると、この部屋に三人入っているのは初めてだ。四角形の机に対して、どのように座ればいいのかから悩んだ。僕と辻村君が向かい合うことになった。

「あの……先生……」

「ん？」

「私タクシー代持ってなくて……」

「まあ……辻村君、そういうつもりじゃなかったんだろ」

「え、ええ……」

「どういうつもりだった？」

「え？いや、何も……」

つい、意地が悪くなってしまうが、相手が高校生だということを思い出し反省した。

「ここからどのくらい？」

「あ、そんなにかからないです」

「じゃあ、これで帰れるかな」

「え、いや……これは……」

僕は、戸惑う辻村君の手の中に、千円札を押しこんだ。

「コーヒー飲む？」

「え、はい、いただきます……」

「月子さんも飲む？」

「はい」

「じゃあ、待っててね」

僕が台所に来ても、二人は黙ったままだった。辻村君は、さぞかし居心地が悪いことだろう。

色々とお疲れた。僕らは、無言のままでコーヒーを飲んだ。月子さんだけが、いつもと同じ顔をしていた。



まず感じたのは、匂いだった。

小さい頃はそれが何なのか分からなかったが、今ではわかる。カツオの匂いだ。

名古屋駅には、思い出がある。

小学生の時、一度だけ県代表として大会に出たことがある。その時の会場が、中部地方だった。初めて新幹線に乗っての旅行は、とてもわくわくしたのを覚えている。そして降り立った名古屋駅は、どこまでも、何番線もホームが続いているかのように見えた。

それ以来、一度もこの駅に降り立つ機会がなかった。今ではホームの多さにも驚かない。当時よりは匂いも薄い気がする。

あの時はさらにここから随分と電車に乗ったが、今回は名古屋での仕事だ。駅近くのホテルに泊まることになっている。

チェックインを済ませ、ぶらぶらしてみることにした。仕事は明日だけなので、今夜は完全に自由なのだ。他の先生たちはどうしているのか知らないが、僕はだいたい遠征のときは当てもなく一人で歩き回ることが多い。偶然発見したものの中に面白さを見つけるのが好きなのだ。

名古屋の街は、思ったよりも落ち着いていた。道が広いからそう感じるのかもしれないが、全体的に余裕が感じられる。きんきらきん、結婚ではスケルトン家具トラックのイメージとはちょっと違う。今のところ。

狭い道も歩いてみる。ゲームセンターや洋服店、よくわからない店。こういうところは、どの街も似通っている。

多くの人とすれ違う。その中で、一人のふらふらとした足取りの男に目がいった。顔はあからんでいて、見るからに酔っ払いだ。最初、何故その男に注意が引かれたのか、よくわからなかった。どこにでもいるような、普通のおじさん。けれども僕は、その人を知っているようなのだ。

「金本の……おじさん」

自分の理解にしばらく納得できなかった。借金取りから逃げた男が、偶然僕に見つかるなんてことがあるだろうか。しかし、結局は納得せざるを得なかったのだ。顔の形、目つき、髪の癖、そういうところが月子さんとよく似ているのだ。

「金本さん！」

僕の声に反応して、おじさんは千鳥足でこちらに寄ってきた。次第に安っぽい酒の匂いが漂ってくる。

「……誰？」

おじさんは僕の顔を覗き込みながら、たどたどしく言う。

「わかりませんか」

「……うーん、わかんないなあ」

「三東です」

「……さんとう？ ……三東……幸典君？」

「はい」

「いやあ、大きくなったねえ」

おじさんは僕の肩をばんばんと叩いた。

「プロなんでしょ……すごいなあ」

「いえ、そんなことは」

「こんどまた指してよ、もう勝てないだろうけどさ」

「……おじさん、どうしてここに」

「……」

心の中で、様々な感情が渦巻いているが分かった。けれども、僕はできるだけ平静を装い続けた。

「名古屋に住んでるんですか」

「あ、ああ。まあ、気分転換ってやつかな」

僕はあっけにとられそうなのを我慢した。

「なぜ月子さんに知らせないんですか」

「……幸典君、月子から聞いたのか」

「……聞いたのか、って、何故聞いていないと思うんですか」

二人の視線が、しばらくぶつかり合った。おじさんの顔が、白くなっていく。

「まさか……幸典君、月子を本当に……」

「まさか？ まさか？ 何を言ってるんですか」

「ああでも言わないと、出ていかないと思ったんだ……。高校にやる金どころか、何も買ってやれなかった。東京に出ていけば何か仕事もあるだろうし……」

「ふざけるな！」

イメージの中では、おじさんを殴り飛ばしていた。けれども僕の拳は、腰の横で震えるだけだった。人の殴り方を知らなかったのだ。

「月子さんは本気でプロになろうとしている。あんたの借金を返すためにだ！」

「……月子が……プロを……」

「見込みはある。……けど、どうするんですか」

「……え？」

「まだ保護者の意見を聞いていません。月子さんにどうなってほしいですか」

しばらく挙動不審に陥っていたおじさんは、突然しゃがみ込み、土下座をした。

「頼む！ 月子をプロにしてやってくれ！」

「……なんのために」

「月子が一人前になれるなら、ぜひそうしてやってくれ！」

「……わかりました。手紙でも書いてやってください」

頭を下げたおじさんの横を通り過ぎて、僕はまっすぐに歩いて行った。僕の一時的な感情は、僕の理性にこう訴えかけていた。「あんな奴のために、プロになることはない」と。

自分探しをする奴なんてバカだと思っていた。自分なんて、今ここにいるものでしかない、そう思っていた。

この歳になって、初めて分かった。意味のないことでも、一度はしななければならないものなのだ。僕は今になって、自分を探している。

月子さんは相変わらず、将棋に対しては真摯だった。だから、心配になる。本当のことを知ってしまったら、どうなるのか。

考えれば考えるほどに、どうしようもない結論にたどり着いてしまう。

僕らには、将棋しかないのだ。だから、将棋を頑張るしかない。



本当によくわからない日々が始まった。

何かを考えないためには、将棋しかなかった。誰に認められるためではなく、自分から逃れるために将棋に集中した。いや、これは幼い時もそうだったのかもしれないが。

読めるだけの専門書と棋譜を読み、コメントを書き込んでいった。これは、弟子から見習ったことだ。会館にもよく足を運ぶようになった。月子さんと共に行くことも増えた。

急に強くなることはないが、成績は少し良くなってきた。ぽっきり折れるような負け方が少なくなったのだ。初めてテレビ棋戦の予選も抜けることができた。

逆に月子さんは初めての壁に当たっていた。誰もが経験することなのだが、駒落ちの上手がきついのだ。特に月子さんは駒落ちで指導してもらった経験なども少なく、定跡を外れたときの対処に不慣れな点がある。また居飛車党にとって香落ち上手は、どうしても飛車を振ることになり苦勞するのだ。

それでも控室で暇そうな先輩を見つけては熱心に教えてもらっているのだから、そのうちこの壁は破ることができるだろう。人に話を聞けるようになっただけでも、月子さんにとっては大きな前進だ。しかし本当にきつい壁は、その先にこそ待っているとでもいい。

毎日が同じように過ぎていく。そして、それはある告知を先延ばしにしていくことを意味していた。毎日一度は考える。もし父親の本当の気持ちを知ったら、月子さんはどうするだろうか。それでも将棋を続けるだろうか。それでも借金を返そうと思うだろうか。もし将棋を辞めたら、月子さんは何を頼りに生きていけばいいのだろうか。その時僕は、何かしてやれるだろうか。何かしてやるべきなのだろうか。

僕と月子さんの関係は、本当に言い表しにくいものになっていた。ほとんど毎日共に過ごし、同じことをして、多分嫌いではなくて。

それでも思うのだ。僕と月子さんは、決定的に他人だ。だからこそうまくいっている部分もあるだろう。けれども、だからこそ一度歯車が狂えば、元には戻れない気がするのだ。

きっかけは色々なところにあると思う。

「三東君」

いつかのときと同じように、低い声で呼ばれた。振り返ると、やはり夏目七段がいた。

「はい」

「今日は金本さんは」

「今日は家にいます」

「そうか……ところで話なんだがね」

やはり夏目七段はどっかりと腰を下ろした。

「金本さんは、女流棋士になる気はないのかね」

「ないようです」

「そうか……いやね、ほら、制度が変わって、育成会がなくなっただろ」

「そうですね」

「それで、なかなか新しく目指す子が入ってこなくて。金本さんならすぐに資格を満たすだろ

うし、活躍できると思うんだが」

いつか、そういう話は出てくると思った。若くてかわいい女流棋士は、将棋界にとっての財産になるからだ。そして多くの奨励会員はプロになることができないが、月子さんは女流棋士になれるだけの実力は十分に持っている。

「夏目さん、彼女は女流棋士になれば、両親を養っていただけますか」

「どういうことだい」

「金本には、それが必要なんです」

「……それは、将棋でなければならぬのかな」

「将棋しかないんです。先生も僕も、そうじゃないですか」

夏目七段は、深く頷いた。

「しかし……まだ誰もなれていないんだよ」

「それはきっと、彼女があきらめる理由にはなりません」

「そうか。すまなかったね」

「いえ」

それがみんなの見解なのだろう、と心の中でつぶやいた。彼女の才能ややる気などではなく、彼女の性別がそう思わせるのだ。

もちろん、そういう見方自体が障壁となるだろう。

僕は、常に注目されない存在だった。だからこそ隙間を縫うように、ひょいと三段リーグを抜けることができた。けれども月子さんは、プロへの階段の全てがニュースになってしまう。もしも僕が月子さんの本当の親ならば、将棋なんかやめさせる。本当に月子さんのことだけを考えてやれる存在ならば。けれども僕は、将棋の師匠なのだ。将棋以外の何も提示してやることはできないし、提示した時点で関係がない人になってしまう。

夏目七段が去っていくと、僕は再び盤上に思考を固着させた。行ける所まで行くしかないのだ。今の僕らには将棋しかないのだと、何度も自分に言い聞かせる。



「あの……先生」

「どうしたの」

「観ませんか」

「何を」

「え……今日は、だって」

「あ」

タイムラグというものを初めて実感した。今日は、僕の対局の放送日なのだ。

月子さんが来てから、めっきりテレビの電源を付けることが減っていた。何となく月子さんの邪魔になることはしたくなかったし、月子さんの家にはテレビがなかったらしく、彼女にはテレビを観たいという欲求自体がないのだ。

そんなわけで、まずリモコンを探すのに苦労した。テレビを点けたときには、すでに対局は始まっていた。自分がテレビの中にいるのは、とても不思議だった。

「あれ……ネクタイ、これ……」

「ああ、なんか途中で気が変わって、換えたんだ」

初めてのテレビ。意識しないようにと考えても緊張するばかりだった。視聴率は1パーセントちょい、将棋ファンしか見ていないのだろうが、それでもやはり「テレビデビュー」というのは一大イベントに思えたのだ。

「やっぱり、普段とは違いますね」

「まあね。でも、対局始まると何もわからないよ」

「……そういうものなんだ……」

画面の中の僕は、明らかに血色が悪く、強そうには見えない。他方、対局相手の貴島五段は気合十分の顔つきだ。前年度は三回戦まで勝ち上がっており、A級棋士と死闘を繰り広げていた、らしい。テレビ棋戦の全ての結果をいちいち確認しているわけではないのだ。まあ、普通のプロは毎週欠かさず放送を見ているのかもしれないが。

将棋の中身は当然わかっている通りなのだが、解説の方は初見である。今回の担当はベテランの津曲八段で、独特の緩急のある口調でほとんど対局に関係のないことを話していた。

相手の三間飛車に対して、オーソドックスな穴熊に潜る僕。よくある将棋だが、それだけに貴島五段の待ちうけるところでもあった。何気ない動きだと思っていた角引きが、遠大な構想の幕開けだったのだ。こちらが飛車先を破る間に、角を切つての端攻め。駒の損得で言えばこちらの大得なのだが、角は受けに利かない駒なのでもらってもそんなにありがたくない。その上穴熊はすぐには逃げられないので、端から攻められると一気に制圧されてしまう恐れがあるのだ。

「こんな攻め……あるんですか」

「感想戦では、少し無理という話になった」

残念なことに早指しの対局では、最善手よりも勢いのある手の方が勝ちにつながりやすい。たった一つの正確な受けを秒読みの中で発見するのは大変なのだ。特に僕は早指しでの成績が悪い。終盤になるほどあたふたし始めて、指し手の関連性がなくなってくる。アマには悪い見本だ。

「なんかね……恥ずかしいな」

「でも、まだ5三角があるから……」

「え、それは……」

只だよ、と言おうとしてハッと気が付いた。同龍の瞬間詰めろが消えて、しかも3五角が詰めろ龍取りになる。まあ同龍以外の変化もあるし、3五角から龍を抜いた瞬間が甘いということもあるが、それでも5三角は感想戦でも出なかった一級品の勝負手だ。

「……あるね。見えなかったよ」

「……でも、龍を取っても負けですね。……うーん……」

実際には勝負手すらなく、攻め潰されて負けてしまった。貴島ファン以外には見所のない将棋だった。

「いやあ、せめてもうちょっといいところを見せたかったな」

「でも、テレビに出られるなんてすごいです。……いずれ、私も」

「そうだね」

そういえば、僕が対局する姿をずっと見られるのはこれが初めてだった気がする。さすがの月子さんも、自分の師匠がどれほどしょっぱいプロなのか分かったことだろう。これからは、自分一人の力で這いあがっていく覚悟を持ってほしい。そのためにも、頼りない僕の姿を見ることも必要なかもしれない。



朝十時。パソコンの前でそわそわする月子さんを見て、僕も緊張してきてしまった。やることは普段と変わらないのだが、多くの人が見ているとなればどうしても固くなってしまう。

第二回竹籠商店街杯。インターネット道場で若手女性棋士がトーナメントで戦う棋戦である。女流棋士はもちろん、学生やアマのトップも参加しており、今回月子さんも「奨励会杯」で推薦された。

月子さんにとって、女性と将棋を指すことも、非公式戦とはいえ連盟主催の大会に出るのも初めてのことだった。日本中の将棋ファンがリアルタイムで将棋を見るわけで、実質的な「お披露目の場」とも言えた。

公平を維持するため、対局する姿はウェブカメラで撮っていなければならない。そのため、いつもより念入りにおしゃれをしなければならなかった。二人で悪戦苦闘して仕上げ、気合を入れて、今ようやくログインしたところである。

対局は最初から三十秒の超早指し。一回戦の相手はアマ最強の小柴さん。いきなり実力が試される相手だ。正直なところ、最近のプロ女流棋士より女流トップアマの方が数段強い。小柴さんも招待選手としてプロの棋戦にも参加し、何回も勝利を収めている。

画面右側に並ぶ、二つの動画。片方は月子さんを映している。落ち着きなく動くため、タイムラグも重なり画像がぶれている。もう一つは小柴さん。普段は公務員らしく、真っ白なスーツが似合っており、至って落ち着いているように見える。

僕はカメラに映り込まないように、ロフトに上がった。僕が見えてしまうと、月子さんに対していらぬ疑いがかかってしまうかもしれない。観戦だけならば携帯でもできる。

観戦者は現在五百人ちょっと。結構な数である。もしこれが会場ならば、その視線は相当なプレッシャーになるだろう。

月子さんの先手で対局が始まった。相手は流行の中飛車。最近女流アマの間では本当にはやっている。月子さんは右銀をするすると上がっていく。最新形だ。研究していることがうかがえ、僕はうんうんと頷いた。

秒読みということで、どんどん進んでいく。中盤に入る前に疑問手も飛び出していたが、まあ仕方ないことだろう。観戦チャットの方もそこそこ活発で、皆が月子さんのことを注目しているのが分かった。

月子さんの攻めが、止まらなかった。途中から、大差になっていた。奨励会でもまれるということは、こういうことなのだと証明する形になったのではないだろうか。83手、月子さんの完勝だった。

チャット上でどよめきが起こっていた。月子さんの将棋は、今までまったく公になっていなかった。他方小柴さんは、強い棋譜をたくさん残してきたのだ。その印象が、一局にして吹っ飛んでしまったのかもしれない。

とは言え、月子さんは奨励会員、プロ組織の人間なのだからアマに勝って当たり前、と僕の立場上思わざるを得ない。問題は次だ。準決勝の相手は、皆川女流初段。辻村君の姉弟子であり、若手成長株の筆頭である。

対局開始は午後一時。それまでに昼食を食べ、紅茶を飲んだ。

「どうだった？」

「大変でした。変な感じでした」

「でも、いい将棋だったよ」

「あまり定跡を知らなかったみたいなので……」

何とも頼もしい言葉を聞いた。弟子の成長というものは、師匠の頬を緩ませるものだと思った

。

二局目。皆川さんは、紺色のブラウスを着ていた。胸元にはネックレス。髪は茶色に染められていて、眉毛も細くきりっと描かれている。月子さんとそれほど年齢は変わらないはずだが、全く違う人種だと感じた。

対局開始早々、波乱が起こった。後手番になった月子さんが普通に角道を開けると、皆川さんは角を交換してきたのだ。そして三四角。筋違い角。アマチュアではそこそこ見かけるが、プロはまず指さない戦法だ。歩得はできるものの、手損した上に角を手放す。効率のいい戦法とは言えない。

しかも、である。この戦法は振り飛車党に多用されるものだ。飛車を振りにくくなるからだが、居飛車党にとってはほとんど損がないのだ。定跡通を乱戦に持ち込むメリットぐらいしか思いつかない。

月子さんはしばらく迷っていたが、普通に金銀を前に押し出して行く順を選んだ。正しい感覚だ。一步損はしたものの、相手の角を目標にして行けば、後手の方が「わかりやすく」なるのだ。

とはいえ、相手も指し慣れているのだろう。少々の抑え込みは甘受する方針のようだ。「指しやすい」「形勢がいい」というのは、「勝勢」とは違う。特にこのような玉の薄い将棋は、あっという間に逆転してしまう。ひょっとしたら、普段からこの戦型を指している方が少しリードしながら対局は進んでいるのかもしれない。

定跡を勉強する気にならない、と女流トップの一人が語っていたのを思い出す。どうせ定跡形にならないのだから、対局観や終盤力を磨いた方が役に立つ、と言うのだ。皆川さんの指し方は、そのことを実証しているかのようである。

「わかった」

不意に、月子さんが声を漏らした。僕には、はっきりとした何かは見えなかった。

端歩が突き捨てられ、歩が垂らされた。銀の横で、次に成っても取られてしまう歩だ。ただし、飛車で取ると角を打てる。つまり、潜在的な歩成りを残しつつ、飛車の動きを邪魔する歩なのだ。指されてみればなるほど好手だった。

皆川さんは焦っているに違いない。指し手の方針が立てにくい局面だ。歩得していても、打つところがないので今のところあまり意味がない。突き捨てられた端を逆襲したいが、手数がかかるうえに隙ができてしまう。正確に指せばそれほど形勢は離れていないのだろうが、秒読みであること、そして月子さんが冷静であることが、皆川さんを追い詰めていると感じた。

そして。予想通り皆川さんは暴発気味の攻めを選んだ。おそらく、月子さんの強さを実感し始め、心を乱してしまったのだろう。月子さんは冷静に受け止めていく。差はどんどん開いていく。

結局、たらされた歩が成らないまま、全てを受け切って月子さんは勝った。まさに、完全勝利だった。

ロフトから降りてパソコンを見ると、唇をかみしめる皆川さんの姿が確認できた。突然現れた女の子に負けたのだから、そりゃ悔しいだろう。しかし先輩棋士としてなら、僕はこう言える。「月子さんの方が努力しているということだ」

決勝戦までも少し時間があつたが、弟子に対して何か言うこともなかった。次の相手は大学女

流ナンバー１のアマだったが、きっと月子さんが勝つという確信があった。月子さんは、他の人間と目指す高みが違うのだ。たどり着けるかは分からない。しかし、しっかりと見据えて進んでいる。

決勝戦の間、僕は本を読んでいた。そして一時間後、月子さんはしっかりと優勝した。

「おめでとう」

「ありがとうございます。……なんか、よくわかんないです」

「何が？」

「どれくらいすごいことなのか……」

チャットの方を見ると、月子さんの活躍に騒然としていた。それだけでもすごいことだが、決して実力以上の結果が出たわけではない。

「とりあえず、勝負だから勝ったら喜ばばいいんだよ」

「……はい」

月子さんは努力して、少しはにかんでみせた。それでいい。満面の笑みは、プロになってからでいいのだ。



順位戦開幕局は関西将棋会館に遠征。名古屋以来トラウマになっていた僕は、前日の夜全く出歩かなかった。

対局当日、福島駅から出ると、だいたい信号は赤だ。三分ほど歩くと、ぱっと見には普通のビルのような関西将棋会館。何となくだが、東京よりも僕はこっちの方が好きだ。梅田から歩ける距離なのに、それほど派手でないというのもいい。基本的に、東京よりも大阪が好きなのかもしれない。

対局相手の黒澤五段は先に上座に着席していた。僕より少しだけ先輩で、三段リーグでも対戦経験がある。見た目の印象は、髪が細い人、だった。スーツの着こなしもいいし、ネクタイのセンスもいい。顔も整っているのだが、髪質だけがとても残念なのだ。本人もあきらめているのか、丁寧にセットなどしている形跡はない。

「三東君、弟子とったんやね」

対局まであと数分だというのに、黒澤五段は気さくに話しかけてきた。まあ、関西ではよくあることだが。

「ええ、まあ」

「偉いなあ。弟子なんか、おっさんがとるもんやと思っとったよ。しかも女の子やろ。大変やろなあ」

「まあ、対局があんまりないんで、少々の苦労は大丈夫です」

「なんや、自虐的やなあ」

定刻になった。「ああ、仕事や」と言って、黒澤五段は両手で頬を叩いた。一礼をして、僕は初手を指す。黒澤五段はすぐに二手目を指した。

そこから後は、のんびりとした調子で進んだ。気が付くと、昼食休憩の時間だった。なんとなくだが、今日は出前を取っていない。外食をしようと会館を出たところ、後ろから駆けてくる足音がした。

「三東さん！」

振り返ると、そこには辻村君がいた。

「よかった。僕も食べに行くところなんです。ご一緒できませんか」

「……いいけど」

この前と違って、今日の辻村君は朗らかな顔をしている。

「ちょっと歩くんですけど、コーヒーの美味しい店があるんです。紹介させてください」

「辻村君、お店に詳しいの？」

「中学までこっちだったんです。不真面目だったんで、普段からここら辺で遊んでました」

そう言って得意げに笑う顔は、とても爽やかで高校生らしい。しかし遊んでいても高校生でプロになれたという事実には、少し腹が立つというところもある。

「あの……先日はすみませんでした」

「ん、ああ。月子さんを送ってくれたんだから、何も悪くないだろ」

「……でも、やっぱり、その。……僕、下心ありましたから」

「……正直だね」

若いだけではなく、辻村君には天性の明るさが感じられる。きっと将棋を除けば、僕なんかとは全く違う世界にいる人間なのだろう。

「その、だから、すみません」

「告白とかすればいいじゃない。そういうわけでもないのかな。だったら怒るかもね」

突然、辻村君は立ち止った。

「あの……ここです」

それは、小さくて古い、いい感じの喫茶店だった。高校生が行くところとは思えないが。

「一人でよく来ました。で、ゲームするんです」

「ゲーム？」

「家では将棋の勉強してないと、親が不安がるから。僕は天才だから大丈夫って言っても、信じてないんですよ。だから携帯ゲームを外でしてました」

窓辺だがあまり光の入らない席に、二人腰かけた。建物に似合ったくたびれたおじさんが、水とメニューを持ってくる。

「これがいいですよ、ビーフシチューセット」

「ふーん」

「これ二つでいいですか」

「任せた」

「おじさーん、シチューセット二つ。ホットコーヒーで」

おじさんは返事もせずに料理を始めた。妙に愛想良くされるよりも、こちらの方が気が楽ではある。

「あの、それで……つっこちゃんのことですけど」

「うん」

「彼女は、何者なんですか。高校でも、将棋の世界でも、ああいう子は見たことがない。皆川さんも相当悔しがってましたよ」

辻村君の目は、好奇心に満ちてきらきらしていた。わからないものに対しては恐怖することもあるが、強烈な好奇心を寄せることもある。特に男というのは、女性の未知なる部分に惹かれやすいのだ。

「それは、僕が説明することじゃないよ。君が研究すればいいことじゃないか」

「けん……きゅう？」

「得意だろ」

ビーフシチューが運ばれてきた。小さなパンも添えられている。

「僕は苦手なんだ、研究」

「あの……」

「ただ……月子さんは、もっと苦手かもしれないね」

二人はしばらく、食べることに集中した。まずくはないが、とても美味しいとも感じなかった。

食後に運ばれてきたコーヒーは、とても好みの味だった。

「月子さんはね……ちゃんとした子供時代を経ていないと思う。そのことは、気にかけてやってほしい」

「……」

帰り道は、将棋の話ばかりした。そういえば対局の途中だったと、ぼんやりと思った。

「みんなが進路を選ぶのを見ると、少し悲しかったんです。僕も、将棋以外の道があるかもしれない、思ったりします」

ふと、辻村君はそんなことを言った。天才なりの悩み、とは思わなかった。僕らは皆、あまり

にも幼い時に職業を決めてしまう。そして、辻村君はまだ、取り返しのつく年齢だ。まあ、そういう理由で将棋界から去った人はほとんどいないのだが。

月子さんは、まだ引き返せるのだ。

どうやら僕は、月子さんのためと思っていたことに対し、疑問を感じているらしい。寂しかった時にたまたま現れた少女。何の躊躇いもなく僕に全てを頼ってくる存在。僕の方が、甘えていたのではないか。

「辻村君……君たちと接することが、あの子には必要だと思う」

「え……」

「……自分一人では決められないことを、決意しなきゃいけない日が来るかもしれない」

月子さんにとって、プロになれないときの決断はどれほど厳しいものとなるだろうか。連盟としては女流棋士になってほしいようだが、彼女にとってはそれでは意味がない。しかし最近の月子さんには、純粹に将棋を楽しむ様子も伺える。彼女を両親の呪縛から解放し、将棋そのものを目的としてやることはできるだろうか。

今のところ、彼女は僕に従うことしかしないのだ。僕が嘘をついても、簡単にそれを信じてしまうだろう。

友人や、ときには恋人も必要だ。

「わかりました」

会館に着き、僕らはそれぞれの盤へと別れて行った。

将棋は、ペースが速くならないまま進んでいき、夕食休憩を過ぎてもほとんど駒がぶつからない展開だったが、突如黒澤五段が果敢に攻めだしてきて、それを丁寧を受けていたら投了された。

「あかんわ。なんか、今日の三東君、えらい落ち着いてるんやもん」

「いやいや、そんなことは……」

自分でもよくわからないが、余計なことを考えているせいか、失敗を恐れることなく指せたのかもしれない。もしくは、本当にたまたま間違わなかっただけなのか。

とりあえず、初めて開幕局に勝つことができた。順位戦で、初めて勝ち越しているのだ。



買い物から帰ってくると、電気が点いていなかった。時間はまだ七時。靴はある。

「月子さん？」

電気をつけた。下にはいない。見上げると、ロフトの中にこんもりとした布団があった。

「どうしたの」

「.....」

今日は奨励会の例会があった。そこで何かあったのだろうか。僕は梯子を上った。

「起きてるよね」

「.....はい」

「ご飯は食べられる感じ？」

「.....わからないです」

「何かあったなら、言って」

「.....Bに落ちました」

絞り出すような声だった。

奨励会では、ある一定の悪い成績を取ると、Bというレッテルが張られる。ここでさらに一定の成績を取ってしまうと、降級するのだ。つまり今月子さんは、降級予備軍ということになる。

「僕なんか、何回も落ちたよ。降級もした」

「.....時間が、ないんです」

「月子さん？」

「こうしてる間にも借金は増えて.....。先生への借金も.....。夢を見るんです。お母さんが、私に別れを告げて.....海へ入って行って.....。それなのに私は、プロになるところか、勝ち越しすら.....」

「月子さん、一つ教えておかなくちゃいけないことがある」

「.....はい」

「挫折を知らないまま成功した棋士なんて、僕は知らない。大天才も、他の大天才に一回は打ちのめされている。だけど、奨励会に落ちたり、降級して名人になった人もいる。並の天才は、挫折を糧にして強くなるんだ」

「.....私は.....」

「ここまでは、生まれ持ったの才能だよ。実戦が少ないのに、これだけの将棋を指せるのはすごい。でもここからは、自分で勝ち取っていくんだ」

「.....はい.....でも.....」

月子さんの手は、僕の胸に伸びてきた。そして、体ごと、飛び込んでくる。

「辛いんです.....。辛いんです」

「.....仕方ないんだ」

やめてしまえばいい、と言いたかった。将棋も両親も捨てて、普通の貧乏な女の子になってしまえ、と。けれども、僕にはそんなことは言えなかった。僕も、将棋を辞められなかったから。どんなに辛くても、将棋を続けたから。それさえなくなってしまった時のことを考えたら、眩暈

がするから。

そんなことも、父親のことも、口に出すことはできなかった。ただただ、そこから動かなかった。

「……先生でよかったです」

「……え」

「よかったです。……なんとか、頑張ります」

なぜか、僕も月子さんから力をもらった気がした。こんな僕でも人から頼られるなんて、月子さんがいなければ知ることができなかった。

僕も、頑張りたい。純粹に、そう思った。



一時間後、月子さんは下りてきた。僕らは遅い夕食をとった。

月子さんが風呂に入っている間、いつものように外に出る。夜空を見上げるが、星は見えない。遠すぎるらしい。

僕は壁に当たった時、ただじっと時間が過ぎるのを待つしかなかった。両親は僕がプロになろうがなるまいがどうでも良いようだったし、師匠とは会う機会さえほとんどなかった。自分のメンタルを調整するすべなんて知らなかったし、将棋のほかに趣味もなかった。だから、落ちるときは底を知らなかった。あるとき、朱里が僕にとって大事な存在になるまでは。

月子さんにとっても、大事な人が必要な時が来るだろう。それが誰なのか……辻村君のような人なのかは、僕の知るところではない。

「幸典」

突然の声に、僕はつんのめってこけそうになった。いつかもこんなことがあったような気がする。

「朱里？」

「今から、家に行こうかと思ってたんだ」

「どうしたの」

街頭に照らされる位置まで来て、朱里の顔がはっきりと確認できた。五メートルほどの距離をおいて、二人は向かい合うことになった。

「この前テレビ観たよ」

「ああ……あれ」

「頑張ってるじゃん」

「そうでもないよ」

「……あのさ」

朱里が俯き、長い髪が垂れ下がった。そう、別れた時よりかなり長くなった髪。

「なに」

「私、勘違いしてたんだよね」

朱里が顔を上げた。僕がよく知っている顔だ。

「私がいるから、安心しちゃうんだって。追い詰められて、独りで苦しんで、そこから立ち直るのが勝負師だって……でも……そうじゃなかった。私がいるとかいないとか、関係ないんだなって」

「そんなことはないよ」

「……幸典はさ、いろんなことに敏感すぎるだけで、でも私はそんなところが好きで……。何言ってるか分かんないね」

「……続けて」

「私の方が辛いから。わがままなのは分かってるけど……戻れないかな」

あまりにも突然のことだった。それなのに……僕の頭はあまりにもはっきりと返答を導き出した。

「無理だよ」

「.....」

何故そう言ったのか、自分でもわからなかった。でも、答えは決まっていたのだ。

「朱里は.....僕じゃなくてもいいはずだよ」

口から出たのは、そんな理由だった。僕の頭が考え出したのかどうかすらあやしいが、この場では有効的だった。

「でも.....可能性ぐらいは、あるってことにしてよ」

「.....同じことを繰り返すことになるよ。俺は、変わらないもの」

「前とは、違う顔してる。テレビで見て、思った」

「.....そんなことはないよ」

朱里は、拗ねたときの顔をした。今の僕には、その表情の甘ったるさを受け取る資格はないと思った。

「ただ、張り合いはあるよ。弟子をとったんだ」

「幸典が.....弟子？」

「ああ。だから、しっかりしなきゃ、って思ってるのかも」

「そうなんだ」

半分は本当だけど、残りの半分は違った。それを言い訳にして、全部のことを簡単に考えようとしているだけだ。

かつては朱里も言い訳にして、プロを目指した。それでプロになれたのだ。だから僕はまた、言い訳を正当化する。

「それなら、私、見守るだけにするね」

「.....ありがとう」

「じゃあ、またね」

「じゃあ。気をつけて」

送っていくよ、とは言わなかった。彼女がどちらに帰っていくのか、知らない方がいいと思ったから。

闇の中へ消えていく、かつての恋人。僕はその人のことをもう好きではないと、今、わかった。



何があっても勝負は続く。勝負師とは、常に勝ち負けにこだわる生き物だ。

Bに落ちた月子さんも、昔の恋人に会った僕も、将棋に向き合う日々が続いた。月子さんは何とかBを脱出し、降級の危機を免れた。そして僕は勝ったり負けたりを繰り返しながらも、ほぼ五割の勝率を保ち続けていた。若手としてはよくない成績だが、僕としては例年になくいい成績だ。

それでも、何もかもが問題なく続くほど人生は楽ではない。

「あの……先生」

「どうしたの」

ある日の夜。夕食後のゆったりとした時間、僕がネットでニュースを見ていると、神妙な顔つきをした月子さんが近づいてきた。

「その……本当に申し訳ないんですが……」

「えらくかしこまるね」

「その……服がちっちゃくなってるんです」

「え……ああ」

確かに、最近月子さんはぐんと大きくなった。初めて会った時の彼女は僕よりも随分背が低かったが、今では僕の鼻あたりまである。体つきも丸みを帯びてきた気がするが、これはあるいは食生活のせいかもしれない。

「そんな恐縮しなくてもいいのに。明日買いに行こうか」

「すみません……本当に、どんどん借金してしまって……」

「ははは、いいよ、すごく強くなったら、倍にして返してね」

口ではそんなことを言うが、最近は僕に対する借金のことなんかどうでもよくなっていた。いろいろと考えながら生活していたら、いつのまにか一人暮らしの時とそんなに変わらない出費にまで抑えられていた、ということもある。ただそれ以上に、月子さんからお金を返してもらうなんてことは、今では想像もできなくなってしまったのだ。出会ったときは他人だったが、今では家族同然に思っている。食事を食べさせるのも、服を買ってあげるのも、義務のような気すらしているのだ。

ただ、月子さんにはそれを言わない方がいい、と思う。彼女にとってお金を返すことは、将棋に打ち込むための大きな動機だからだ。そして、家族を再び手に入れることが彼女の目的である以上、僕は彼女の家族でない方がいいのだ。

少し、寂しさも感じる。将棋の師弟というのは、はっきりとしたきずなで結ばれているような、ただの書類上必要な関係のような、曖昧なものだった。病気と闘いながら共に暮らしたような子弟もあれば、何年間もほとんど会話もないままの子弟もいる。僕たちの関係は珍しいだろうが、というのがオーソドックスかと言われても答えづらい。

次の日、朝から僕らは買い物に出かけた。二人とも人混みが苦手で、平日の午前中が一番出かけるのに適しているのだ。社会人ぐらいの男と高校生ぐらいの女が昼間からぶらぶらしていれば、相当不真面目なカップルに見えていることだろう。

大きなショッピングセンターに着くと、月子さんにお金を渡してそれぞれ単独行動ということになる。女の子の服のことは相変わらずわからないし、だいたい月子さんから切り出すときは下着などが必要となった時だから、ついていくのがためられる。

特に自分のものはいなかったの、雑貨店などで時間をつぶした。昔からこまごまとしたものを見るのが好きで、気に入ると要りもしないのに何本もペンなどを買ってしまう。今日は、「一行日記帳」というものに目がとまった。その名の通り毎日一行だけ、三年間日記が書けるものだが、「50%オフ」のシールが貼られていた。僕は、その日記帳を購入した。

そして、買った後すぐにいつも思う。これ、本当に使うのかな？

待ち合わせの時間まではまだもう少しある。何となくぶらぶらしていたら、時計店の前にいた。こういう高い小物にはあまり興味なかったが、店内でカップルが腕時計を選んでいるのを見て、気が付いたことがある。月子さんは、女物の腕時計を持っていない。僕が昔使っていた大きなものを貸しているが、あれでは女の子として可愛くないなあ、と今初めて思った。

月子さんに選ばせたら、きっと遠慮して安いものを買う。そう思った僕は、躊躇わずにそこそこの腕時計を購入した。

そろそろ時間だ。待ち合わせの場所に行くと、月子さんはすでに来ていた。両手に紙袋をぶら下げて、きょろきょろとあたりを見回している。

「お待たせ」

「あ、いえ、待ってないです」

月子さんは手をぶんぶんと振り回したが、紙袋も一緒に振り回されて、遊園地の乗り物のようになっていた。

「ご飯食べようか」

「はい」

本当にデートみたいだな、と思った。朱里はいつも僕を待たせていたから、この感じはちょっと新鮮だ。

外食も久しぶりだったし、なんとなく気持ちが落ちていた二人が、優しく笑えた気がした。

それなのに……



帰宅すると、玄関の前におばさんがいた。大きなリュックを抱くように座っていて、髪の毛はぼさぼさ、服も薄汚れている。階段を上ってくる月子さんを見つけるなり、喉を震わせてずっと彼女の顔を凝視している。僕はこの人に全く見覚えがなかった。しかし、その顔つきやたたずまいは、初めて見るようには思えなかった。

「月子ちゃん！」

「お母さん！」

「お母さん？」

そう、このおばさんは、月子さんによく似ている。それは、親子の再会だった。母親は、娘を抱きしめた。

「ごめんね、月子ちゃん。ずっと、迎えに来ようと思ってた……」

「……お母さん……」

「お母さんね、お父さんと離婚したの」

「……あの……」

「それですぐに迎えに来たかったけど、生きていくので精いっぱい……でも、こんなお母さんと再婚してもいいって人がいてね……お金もないし、弱気な人なんだけど、お母さんこの人と生きていこうって。ね、月子ちゃん、新しいお父さんと、三人で暮らそ」

突然の話に僕は見ているしかなかったが、月子さんも戸惑っているようだった。感動する暇もなく、突然の話が襲いかかってきているのだ。

「わ、私は……」

「もう、将棋なんかしなくていいの。ね、ちょっと遅れちゃったけど、何とかして高校にも行かせてあげるから」

「……お父さんはどうなるの？」

「お父さんは、一人で借金を返すからって。私たちに心配はかけないからって。月子ちゃんがお金のことを心配する必要はないの」

「……わかんない。よくわかんない」

その時、初めておばさんと眼があった。僕がいることに初めて気付いたかのようだった。

「三東先生……今まで本当にありがとうございました」

「……いえ」

頭を下げられたので、僕も頭を下げた。

「さ、月子ちゃん、準備して」

「お母さん……私、行けない」

月子さんは母親の腕から逃れ、真正面から対峙した。

「私、お父さんとお母さんと三人で、普通に暮らすのが目標だった。だから、別の人と暮らすって言われても……。それに、私、将棋のプロになるの」

「月子ちゃん……無理にそんなもの目指さなくていいのよ。あんな男くさくて博打みたいな世界からは早く抜け出さなきゃ」

「私、将棋が好きなの」

「月子ちゃん……」

「どうしていいのか、突然過ぎてよくわかんないけど……でも、将棋を辞めるとか、ここから離れるとか、すぐに決められるようなことじゃないの……。ごめんなさい……」

三人の時間が、別々に動いて、それでいて全てが止まっているようだった。母親は、失っていた娘との生活を取り戻そうとしている。月子さんは、足枷のようになっていた父親の借金から解放され、家族との暮らしを手に入れられる。僕は……僕のメリットは、只飯食らいがいなくなるということだろうか。少なくとも、僕らは今不幸に直面しているのではない。けれども、誰も幸福な顔をしていない。

「月子ちゃん……将棋を続けたいの？」

「うん」

「先生……止めてください」

「……え」

「向いてないでしょう？ 月子は将棋なんかに向いてないでしょう？ あの人のせいで無理やりやらされていたんだから、もうそんなことから……」

「僕が決めることじゃないです」

自分の出した声が、とても低くてとがっていることに驚いた。感情が抑えられないらしいが、それがどんな感情なのかはよく分からない。

「向いているとか、いないとか。ただ僕は、月子さんの頼みを受け入れました。そして月子さんは奨励会に受かって、昇級した。そんな子を途中でやめさせる師匠はいませんよ」

「先生までそんな……」

なんとなく、自分の心の中で膨れていく感情の名前が分かってきた。それは、憐れみだ。この人は、自分の都合でしか娘を愛せないのだ。本当に必要ならば、最初から手放してはいけなかった。本当に大事ならば、娘の目標をもっとじっくり聞いてやらねばならない。僕と過ごした日々のことを聞きもせず、ただ自分の元に引き戻そうとする身勝手さを、僕は憐れんでいる。

「どうするかは、月子さんが決めればいい」

「……私……そこには行けない」

月子さんは僕が握っていた鍵を奪い取って、乱暴に玄関を開けた。そして、家の中に飛び込んで行った。

残されたのは、初対面の二人。

「あの……」

「考える時間をあげてください。落ち着いたら、考えも変わるかもしれません」

そのお婆さんは、何もかも信じられないとでも言いたげに、何回も首を振った。そして何も言わずに振り返り、そのまま去って行った。

一人きりになったマンションの廊下で、僕はもっとお礼を言われてもいいはずなのにな、と少しだけ怒りが込み上げてきた。



彼女は、ロフトの上で泣き続けた。僕は、ただその声を聞いていた。

慰める言葉など、意味があるだろうか。全て、僕が知りもしない状況なのだ。多額の借金も、失踪した両親も、新しい父親も、目標への諦めも、僕の人生にはなかったこと。わかったふりなんて、とてもできない。

それでも、今そばにいてやれるのは僕しかない。彼女にとって唯一明白な関係性を持った存在。僕らはお互いのことをどう思っているとか、話したことはない。けれども、絶対に敵にはならない、そういう確信を抱き合っていると思う。師匠と、弟子。家主と居候。言葉で表せばそうなのだけれど、もっと簡単に、もっと根本的なことで二人の関係は成立している気がするのだ。

それが僕の思いすごしだとしても、かまわない。少なくとも、僕は月子さんを信頼している。どんな答えを出してもいい。失敗しても、後悔してもいい。ここから出ていくことになっても、将棋の道をあきらめることになっても、僕は何も反対しない。

何かのきっかけですごく変われるほど、僕の錆付きは容易いものじゃなかった。それでも、何かが少しずつ変わっている実感がある。僕の前に月子さんが現れなければ変わらなかったことを、少なくとも僕は、変えたいと思った。

もう、十分だ。か弱い少女から受け取る恩恵としては、本当に充分すぎた。そして、僕もできるだけのことを月子さんにしてきたつもりだ。師匠であり、父のようであり、兄のようであり。なにも後悔することはない。この先も望まれれば続けるが、ここで終わるといふのならそれはそれで解放されるということだろう。

ふと、月子さんがいなくなった後のことを考えた。あのときのように、突然一人になって。けれども僕は、そもそも引き止めなかったのだ。朱里の選択の正しさを、わかっていたから。僕は、仕事でしか人に会わず、そして仕事はとても少なかった。この部屋の中で、ずっと過ごしていた。将棋の研究だったのだが、それはプロとしての義務みたいなもので、強くなるためにやっていたとは言えない。

また、あの頃の僕に戻ってしまうのだろうか。

もし、戻らないとすれば、本当に変わったということだ。

どれぐらいの時間が過ぎただろうか。外は暗くなっていた。空腹を感じた。昼、幸福だった食事を思い出し、そして、渡し忘れていたものを思い出した。

泣き声がやんでいった。見上げると、ロフトから顔が出ていた。

「先生」

目は赤く腫れていたし、髪の毛もぐしゃぐしゃだった。それでも月子さんは、はっきりとした声で僕を呼んだ。

「うん」

「なんか、家族のことで……すみません。ずっと迷惑かけてばかりで」

「別にいいよ」

「あの……私……自分でもよくわからないんです。どうすればいいのか、どうしたいのか……」

でも……」

「でも？」

「はっきりしてるのは……まだ、先生に借金を返せてないんです。だから……プロにならなきゃ駄目なんです」

「……ふふ」

思わず、小さく嘖き出してしまった。そんなこと、すっかり忘れていたからだ。

「……なんで笑うんですか。真面目に考えたんですよ」

「いや、だってさ、変じゃない。借金返すために弟子入りして、師匠に借金返すためにプロを目指すなんて」

「そ……そうなっちゃったからしょうがないじゃないですか」

「そっか……気が変わった」

「え？」

僕は、半分まで梯子を上り、右手を伸ばした。

「これをあげようと思ったけど、貸すことにするね」

「これ……」

月子さんは僕の手から、腕時計を受け取った。しばらくまじまじと見ていたが、ゆっくりと左腕に巻いた。

「こんなにいいもの……えっと……借りていいんですか」

「ああ。いつものやつじゃ、かわいくないだろ。最初の給料で、買い取ってよ」

「……はい」

「明日からも、弟子なんだね」

「はい。今後も、よろしくお願いします」

「お腹すいたね……ピザ取ろうか」

「……なんか、懐かしいですね」

「そうだね」

僕が梯子を下りると、月子さんも続いて下りてきた。いつものように、二人で向き合ってテーブルの前に座った。

「先生……私……」

「なに」

「私が頑張れば、両親もうまくいくと思ったんです。でも……さっきの母を見て……きっと借金がなくても、二人はすれ違っていたって、そう思ったんです」

淡々と、月子さんは言った。大人になったんだな、僕はそんなことを感じた。

「それに……まだ、父の借金から解放されたとは思えないんです。母が見捨ててしまったから余計に……私しか助けられないと思うんです。母は他人になれても、私には一生父親だから……」

名古屋で出会った、金本のおじさんの姿を思い浮かべた。あんな人でも、月子さんにとっては大事な父親なのだ。どこまで行っても、月子さんの心を支えているのは、両親に対する想いなのだろう。

「でも……でも、将棋をもっと楽しみたい、そう思うんです。……いい、ですよね？」

「そうだね。月子さんの思うままでいいよ」

今回はネットのページをじっくりと見て、二人で注文するピザを決めた。月子さんは、どれも食べたことがないと言って、興味深々だった。

「今日で、人生二回目です」

それはまだ作り笑いだったが、とてもいい笑顔だった。



三月十一日。運命の日がやってきた。

C級二組最終日。僕の成績は五勝四敗。今日勝てば初めての順位戦勝ち越しで、しかも規定により降級点が一つ消える。そして、ここまでの年間成績が十四勝十五敗。今日を含め、残りの対局は二局。二つとも勝てば、勝率五割以上の目標が達成できる。

対戦相手は、ルーキーの品川四段。現在三勝六敗で、わずかながら降級の可能性を残している。対戦はもちろん初めてだが、会うことすら五年ぶりぐらいだった。中学生で三段リーグ入りし、将来を期待された若者だった。しかしリーグでは苦戦し、ずっと指しわけぐらいの成績だった。一年前ようやく四段に上がったが、そこからも目立った成績は残せていない。

まるで、僕だ。品川君は、僕と同じ道を歩み始めてしまった。

上座の僕。そして、下座にちょこんと座る品川四段。久々なのだろう、スーツは異様に角ばって見えるし、ネクタイは傾いている。就活を始めたばかりの学生のようなのだ。

勝ち越し・降級点消去と、降級点回避のための戦い。見所がないわけではないが、やはり周囲の目は僕らの方には向いていなかった。もし僕が例年通りの成績だったら、順位戦から姿を消しそうな若手として注目されたかもしれない。しかし今年は、ある意味例年以上に影の薄い存在なのである。

ゆっくりと、駒組みの時間が流れていく。まるで、一切の異物を拒むかのような、品川四段の穏やかな指し手。何千局と指されてきた、ありきたりな形の中に溶け込もうとするかのようにだった。僕も、それに追従するしかない。品川君が目指す、古典の中の希望を、共に見てみようと思った。五年前の僕がそうであったように、ただ仕事として将棋を指しているのか。それとも、もがきながら、現状を打破しようとしているのか。それを知りたくなった。

夕食休憩後も、前例の多い形のままだった。そして、品川四段は仕掛ける気配がなかった。こちらから突っかけるのは無理な形で、僕は隙を見せないように手待ちをするしかない。相手も、飛車を引いてこちらの動きを待つ。お互いに飛車だけが細かく動く。記録係が「三回目……」とつぶやいたのが聞こえた。僕が飛車をさらに動かし、四回目の同じ局面が現れた。

「千日手ですね」

「はい」

品川四段は顔色一つ変えず、駒を直し始めた。まるで、最初からその予定だったかのような落ち着いた様子だった。

指し直しまでには少しの休憩をとれることになっている。記録係の子も、トイレに駆け込んでいた。僕は控室で、コーヒーを飲んだ。最悪、もう一度千日手になることだってあり得そうな空気がした。

品川四段は、ただ古典をなぞっただけだった。時間が有利になるでもなく、ただ単に僕に先手を渡した。彼はひたすらに転げ落ちようとしていると、僕は確信した。

他の対局が勝負どころを迎える中、僕らの対局は再び初手から始まった。いつもと違い、飛車先の歩を伸ばした。なんとなく、そういう気分だったのだ。そして品川君も、飛車先の歩を突いた。相掛り。普段ほとんど指さない戦型だ。しかし、不思議な懐かしさを感じる。それが何な

のか分からないまま、対局は続いていった。

そして、作戦の岐路となるところで、僕の思考は特定の過去へと追いついた。そう、あの時。初めて彼女と対局したあの時、僕は後手の側を持っていた。あの時僕は彼女を試す意味で、あえて相掛りを選んだ。多分今回も無意識のうちに、品川四段を試す意味で相掛りに誘導したのだ。

ならば。僕は角を上がり、ひねり飛車の意志表示をした。最近、こんなオーソドックスなひねり飛車など公式戦ではほとんどお目にかかっていない。隣で対局しているベテランの先生が、こちらを覗き込んでにやっとした。「懐かしい」と感じたのだろう。

将棋を覚え始めたころ、今のようにネットで情報を得ることはできないし、教材は古いものしか手に入れられなかった。みんながゴキゲン中飛車や四間飛車を指していることすら知らず、僕は角換わり腰掛け銀や、相矢倉、そして相掛りの棋譜で将棋の勉強をした。

ヒネり飛車の棋譜は、その中でも印象に残るものが多かった。大きく飛車角が動き、歩の手筋でどんどん攻め込んでいく。さらに自陣は美しい美濃囲い。子供心に、将棋の完成系を見た気がした。

実際には後手の対策が進み、今では勝ちにくい戦法の一つになっている。若手はシビアなので、そんなものにはあえては手を出さない。僕だって今日まで、公式戦では指したことがなかったのだ。

細かい違いがすぐに形勢の差へと結びついてしまう戦型だ。本当ならばもっと時間をかけて読みたいが、すでに持ち時間は一時間を切っている。時計を見ると、十時五分。終局するところも始始めており、周りの様子から昇級者が決まったらしい雰囲気だ。

細かい成績までは見ていないが、品川四段の結果次第で降級点が付くかどうか決まる人は、僕らの将棋をやきもきしながら見ていることだろう。記録係の青年が、目をこすっている。おそらくこの対局は日をまたいで、一番最後まで残る。この対局は、多くの人を巻き込んで長引いていくのだ。

「いっっちゃうか」

日付をまたいだころだろうか。ここまでまったく声を出さず、物音さえほとんど立てなかった品川四段が、呟いた。盤面に集中していてわからなかったが、いつの間にか鋭く、危険と言えるほど尖った目つきをしていた。

そして、5三にいた角が、9七にいた桂馬を食いちぎった。当然同香と応じる。そして8五飛車。駒損をして飛車をさばく非常手段だ。とても千日手に甘んじていた人間とは思えない、激しい打開の仕方だった。

気が付くと、他の対局は全て終わっていた。広い部屋の中で、ちょっとだけだが、タイトル戦であるかのような優越感を覚える。

両者60秒の秒読みに入った。激しく攻めたてる品川四段と、きわどく受けながら反撃する僕。この時間、この空気の中で最善手など指せるわけがない。しかし、頭の中は高揚して、快樂さえ感じるようになっていた。これがランナーズハイというものだろうか。

時間は二時を過ぎていた。白玉はいかにも危ない形だが、多分、詰まない。これが詰まされるなら、もうそれはしょうがない。僕は、じっとと金を寄った。この手自体は詰めろだが、まだま

だ受けの手段はある。こちらに詰みなしと分かっていたら、受けないだろう。しかし直観は、品川四段が攻めてくることを告げていた。一年目の僕ならそうしている、という記憶も影響しているのかもしれない。

そして品川四段は、僕の玉を詰ましにきた。これは、明確に詰まない。かといって形作りというわけでもない。まだ、慣れていないのだ。詰みがありそうなところで、踏み込まずに受けて焦らす。そのような勝ち方を、品川君は知らない。僕も昔は知らなかった。そして、知っていてもできなかった。

そこから手数は長引いたが、間違いは起こらなかった。

「負けました」

力ない声だったが、それだけ全力を出し切ったということだろう。時間は三時。まだ残っている人はいるようだが、なかなかこちらの部屋に入ってこない。

「そうか……」

品川君は、呟いた後唇をかんだ。

僕の降級点が一つ消え、そして、品川君に降級点が付いたのだ。

短い感想戦を終えた。

「いやあ、そもそも千日手がいけなかったですかね」

「そうだね」

僕の言葉に、品川君の視線が固まった。普通は、感想戦は穏やかに終わる。だから、はっきりと同意されることなどないと思っていたのだろう。

「僕も一年目から降級点を取って、五年間沈んだままだった。今日の一敗が、尾を引かないように頑張ってよ」

「……………はい」

それは、過去の自分に言ってやりたい言葉だった。品川君は僕の間を見たま、小さく頷きを繰り返していた。



家に着いたのは四時過ぎ。それでも、電気が点いていた。早起き、というわけではないだろう。

「ただいま」

「おかえりなさい。……あの、おめでとうって言っていいですか」

「……え」

今まで月子さんとは、自分の成績について話したことはなかった。調べることは簡単だが、あまり興味がないものと思っていた。

用意してあったのだろう、月子さんはカップにお湯を注いでいる。インスタントコーヒーを作ってくれているのだ。

「やだなあ。昇級したわけでもないし」

「……先生、私知ってるんですよ。順位戦、初めての勝ち越しですよね」

「……うん」

「最初から……全部知ってました。いつも連盟のページ見てたから……だから先生が今年すごく頑張ってるんだなって。私も頑張らなきゃ、って思ってた」

「……ぜん……ぶ？」

働きの鈍った頭で、過去のことを思い出してみた。対局があると嘘をついて、当てもなくぶらぶらしていた。

月子さんは、知っていたのだ……

「……先生。先生は私の自慢の師匠なんです。タイトルホルダーにも負けない、立派な師匠なんです。だから……その……」

「弱くてもいいじゃないか、ってこと？」

「そうは言わないですけど」

「いや、そうなんだ。僕は弱いプロだ。でも、弱いなりに頑張らなきゃって、最近はどういうようになった」

「そんなわけで、お祝いってことでいいですか？ いいですよね」

「そうだね。うん。ありがとう」

目の前に出された、湯気の立つコーヒーに口を付けた。温かかった。胸の奥まで、温かくなった。

「あのね、月子さん。去年、目標言っただろ」

「はい」

「昇段って言ったけど、心の中では、年度成績で勝ち越したい、って思ってたんだ」

僕の告白に、月子さんは満面の笑みでこたえた。

「実は私も、初段じゃなくてせいぜい2級かな、って思ってた」

「なんだ。まあ、目標なんて言ったものの勝ちか」

「そうですね」

もうすぐ朝が来る。頭も体も疲れてへとへとだったが、いつになく幸せな気分だった。月子さ

んは実際、2級に上がった。僕の方は、次こそが大勝負だ。

次の、今年度最後の対戦相手は、辻村五段。



人生で、こんなに気合の入ったことはない。だが、僕は今ものすごくテンションが落ちている。

僕の前にいるのは、金本のおばさん。すでに金本姓ではないのだろうか。僕とおばさんは、二人きりで会うことになった。個室のある居酒屋に呼ばれ、挨拶するなりおばさんは鞆から茶封筒を取り出した。それを、僕の目の前に置く。

「本当に少ないけれど、感謝の気持ちです」

「はあ……」

予想はついていたが、一応中身を確認する。一万円札が十枚入っていた。

「あの……」

「わかってます。これでは全然足りないのは。でも今私が用意できるのはこれだけなんです」

「……これを受け取ると、月子さんはどうなるんですか」

「もちろん、私が引き取ります」

そんな話だろうとは思っていたが、言われてみると虚しくなる。

「月子さんは、この前自分の気持ちをちゃんと言いましたし、僕が何か決めることはできません」

「……あの人と同じなんですね」

「は？」

「将棋将棋って。将棋が強くて何になるんですか！ あなたも月子に色々と吹き込んで洗脳したんでしょ！」

今にもつかみかからんばかりの剣幕だったが、不思議と僕は落ち着いていた。今おばさんが何をしたらって、結論は覆らないと分かっていたから。

「それなら、手放すべきではなかったんじゃないですか。月子さんは自転車に乗って、ぼろぼろになりながら僕のところまで来ました。両親のためにお金が必要だからって。どうしてもプロになりたいから、弟子にしてくれって言われました。その時、あなたは何をしていたんですか」

「私には私の事情があったの！ 何も知らないくせに！」

店員が入ってきて、おどおどしながら付け出しを置いた。

「あの、ご注文は……」

「あ、僕はこれで帰るんで」

「あの……」

僕は封筒を突き返し、その上に五百円玉を置いた。

「あなたには一円もお世話になりません。月子さんを迎えに行きたいなら、直接向き合ってください。僕は、知らない」

そのまま立ち上がり、僕は店を出た。あの母親と、あの父親。あんな二人と暮らすために、月子さんは頑張ってきた。色々とはからしくなってくる。それでも、それでも月子さんにとってはたった二人の肉親なのだ。

家を出る前に見た長手数詰めの将棋のことを、無理やり考えた。当然だが、解けるわけがなか

った。



最近よく、月子さんは天井に頭をぶつける。

もう二年もたつのだから、距離感はつかめているはずだ。それでも、頭をぶつけるのは、成長している証だろう。

そう、彼女はロフトで生活して二年になるのだ。起きている時間は下で過ごしているし、そもそももっとひどい所で暮らしていたということで、不満を言うことなんてなかった。けれども十七歳になろうという女の子が、いつまでもそんな狭い所に押し込められていていいのだろうか。

成績が上がれば、収入も増える。それでもまだ裕福というわけではないが、二人で暮らして行くには十分だろう。

二人とも目標を達成できたら、新しい家に住んでもいいだろう。ちゃんと部屋が二つある家に。



僕にとって今年最後の一局。特に注目などない一次予選。見所と言えば、すでに対局数一位を決めている辻村五段が、勝率でも一位になれるか、というところだろう。しかし僕が勝つなどとはだれも予想していないので、勝率の方も安泰だと思われる。

奨励会でも対局があるが、一度も勝ったことがなかった。率直な感想は、馬力が違う、ということだった。読みのスピード、深さ、そして度胸。生まれ持っている強さが違うのだ。かろうじてプロになるのは僕の方が早かったが、順位戦でも、その他の棋戦でも僕のことをあっという間に抜いていった。僕の年齢になっている頃には、タイトル挑戦などのいくつかの勲章を得ていることだろう。

モノが違うのだ。同じプロでも、全く違うのだ。おそらく、百番やったら七十番以上負けるだろう。それぐらいの差はある。ただし、どれだけ大事なところで残りの二十数番の勝ちを呼び寄せるかも、弱いなりにプロの技なのだ。今日は、僕にとってだけ特別な対局だ。僕が勝手に決めた目標が、いつも以上のやる気を引き出している。辻村君にとっては、普通の対局の一つでしかない。

そう思って対局に臨んだのだが、いざ向かい合ってみると様子が違った。

「おはようございます。楽しみにしていました」

「おはよう。なんで楽しみだったの」

「つつこちゃんが、あれだけ褒める人だからです」

「……」

辻村君の瞳は、らんらんと輝いていた。ようやく無二のライバルに巡り合えたとも言わんばかりだ。月子さんが何を言ったか知らないが、それで僕の将棋が見直されるなんていうことがあるのだろうか。

なんとなく。なんとなくだが、辻村君は振られたんだろうな、と思った。好きとか嫌いとかではなく、月子さんは将棋に夢中で、だから将棋の師匠が大事なのだ。

対局が始まって、感情が揺れるということはない。ないものは出せないから、序盤は本当にいつも通りのことをするだけだ。辻村君は特に凝ったことをするタイプではないから、局面はオーソドックスな相矢倉になっている。先手の僕は、いつも通りの組み上げ方。後手の辻村君も、教科書通りの指し手が続けている。

昼食休憩。もちろん、今日は辻村君と食べに行くなんてことはしない。どうしようかと思っていたが、本当になんとか、またあそこに行ってみたくなった。会館を出て、僕の足は野球場の方へと向いた。

十数分歩いて着いたのは、ゴルフ練習場のレストラン。一年以上前、僕が逃げ込んだところだ。

そこで、再びサンドウィッチを食べた。ざわめきも何もない心で、料理が来るのを待つことができた。そして、今日のものは、前回の倍ぐらいうまいと感じた。

対局室に戻ると、すでに辻村君は盤の前にいた。扇子で音を鳴らしながら、盤上に意識を集中させている。格好いい、と思った。スーツも似合っているし、ネクタイのセンスもいい。しかし

そんなことを除いても、彼には戦う者としての美しさがある。

そのあと、僕はもちろん全力を尽くした。いつになく調子はいいと思った。それでも常に、辻村君の読みの方が上回っている実感があった。うますぎるサンドウィッチが、喉の奥につかえているような気がした。強くなる魔法が掛かっても、まだ相手の方が強いという現実、少し怯えてしまった。

相矢倉の先手番が定跡通り攻めれば、だいたいはぎりぎりの細い攻めをつなぐことになる。駒の価値が、位置や関係性によってめまぐるしく変化していく。香車を捨て歩を取り、角を切って手に入れた桂馬を打ちすえる。こちらが作った成駒の威力を弱めるため、玉の位置を変える。その玉を引きずり戻すため、駒を捨てる。逃がさないように、逃がさないように、逃がさないように……

気が付くと、僕の攻めは完全に切れていた。相手の玉は隅っこにくぎ付けになっているが、それを攻めきるだけの戦力はない。いつもどおりよりも少し冴えわたった頭で、必死になって考えてきたのだ。それでも、全然届いていなかった。

あやを求めて指し続けたけれど、逆転がないのは分かっていた。辻村君は研究に頼り切っているわけでもなければ、天賦の才の上に胡坐をかいているわけでもない。常に全力で、最も勝てる展開を探るタイプだ。たとえ有利になっても、緩むとか、方針を変えるといったことがない。

悲惨だとは思わない。これもまた、勝負師の宿命だ。敗者という役割があって初めて、勝者は輝く。弱小プロの「勝ち越す」という夢すら、生半可には叶わないのだ。

「……負けました」

夜十時。僕の一年は、ほぼ終わった。

「先に端だと、こちらが駄目でしたね」

「……え？」

最後に、濃密な感想戦が行われた。辻村君は、自分が負ける変化までも深く深く読んでいた。本当に、かなわない。

「……期待に応えられなかった。つまらない将棋だった」

「そんなことないです。先生……失礼かもしれませんが、三東先生はこの一年ですごく強くなった気がします。調子とかではなく……強くなったと。僕は、先輩が自分より速い速度で強くなるのが怖いんです。だから、絶対に負けられません。貯金で勝ちたくないんです。ずっとずっと、強くなり続けたいんです」

こちらが恥ずかしくなるくらい、まっすぐな言葉だった。高校生の頃の僕は、ただ認められたいという一心で将棋を指していた。どこかを目指していたわけではない。辻村君には、頂へと続く道が見えているようだ。

若者には、教えられることばかりだった。

「将棋、楽しいかい」

「もちろんです」

自分は、そのように断言できた時期がほとんどない。悲しい事実だか、悲観ばかりというわけでもなかった。今からでも、遅くはないと思う。

「じゃあ、また今度」

「楽しみにしています」

結局、内なる目標の方も達成できなかった。悔しいが、清々しくもあった。



「ただいま」

「あ、お疲れ様です」

「ごめん、昨日になっちゃったね」

そう言って僕は、テーブルの上にコンビニの袋を置いた。

「誕生日おめでとう」

「ありがとうございます。でも、まだ今日ですよ」

昨日は、月子さんの十七歳の誕生日だった。対局と重なってしまったので、特に何もすることができなかったのだ。せめてもと思って、ショートケーキを買ってきたのだ。

「だって、時間……」

「見てください」

月子さんは左腕を突きだし、右手で腕時計を指し示した。見ると、十一時二十分だった。

「え、でも……」

自分の腕時計は、十二時二十分を示している。掛け時計もそうだった。

「私のが一番新しいから、きっとこれが正しいんですよ。……そういうことで」

「わかった」

十七歳になった月子さんは、初めて会った日とはまるで違い、優しい嘘をつけるまでになった。

「あの……それで……」

「今日は、負けたよ」

「……そうですか……」

「来年度こそ、目標達成かな」

「私も、です」

二人でケーキを食べながら、他愛もないことを話した。将棋以外のことを話せるのが、とても幸せだと思った。



緊張を隠すために、全く関係のない棋譜を並べたりした。それでも、自分に向けられている視線を感じないわけにはいかなかった。

今日は、特別な日になるかもしれない。しかし、ただの通過点でしかないかもしれない。大きな後悔を生む日にだってなるかもしれない。

あの日から、四年半。奨励会に入ってから、約四年。十九歳の月子さんは、三段リーグ二期目にして、昇段のチャンスを迎えていた。今日の対局が始まる前までは三番手。二連勝すれば、かなりの確率で昇段できるという状況だった。

史上初めての女性正会員の誕生か。二段になった頃からざわついた感じはあったのだが、いよいよその実現の可能性が濃くなってきたため、大きな関心が寄せられることになった。あまり見たことのないマスコミ関係者も取材に来ている。

当然師匠の僕に対する興味もあるようで、いくつか取材を受けた。もちろん、月子さんの親のことなどは言わなかった。それでも特殊な形の師弟ということが、物語の味付けとしては良かったらしい。

僕らにとって、将棋以外のことで苦難の連続だった。二人とも注目されることが苦手で、できればそっとしておいてほしかった。それでも期待や好奇心は、様々な人の目を引きつけてきた。その中で、月子さんはくじけなかった。嫉妬や中傷すら耐えて、ここまで来た。当初彼女を支えていたお金や家族への思いではなく、純粋な将棋への気持ちが力となったのである。

今日僕が来ているのは、月子さんの負担が減るようにするためでもあった。彼女も随分と成長したが、それでも基本的には人見知りだ。マスコミの我儘な取材は、精神的な安定を脅かす。それを、出来るだけ僕が代わってやりたかった。

一局目が終わったとの知らせが届いた。候補の三人が全て勝った、ということだった。これで、月子さんは変わらず三番手。他力だが、自分が勝ち、上二人のうちのどちらかが負ければ昇段である。このような時、全員が連勝するなんていうのは見たことがない。二人のうちどちらかが負けると信じて、自力のつもりで頑張るしかないが、月子さんの気持ちは今どうなっているだろうか。

「やっぱり来ていたんですね」

控室に入るなり僕に声をかけてきたのは、辻村七段だった。成績は相変わらず素晴らしいが、最近はおしゃれに凝り始めて逆に恰好悪くなっている。今日はマスコミが来ていることも織り込み済みなのだろう、茶色い髪をピンピンに立てて、ついでに襟首も立てていた。

「そりゃあね」

「行けそうじゃないですか」

「そんなにすんなりとは、普通いかないよ」

それは、僕自身を落ち着かせるための言葉だった。今まで女性は三段リーグにすら入れなかったのに、月子さんは十八歳でそのハードルを飛び越えてしまった。そしてたったの二期で昇段のチャンスを迎え、そのプレッシャーの中一局目を勝つことができた。このままプロになれば、女性としてだけでなく、普通の若手としても有望株の一人に数えられるだろう。

実は月子さんは、去年のうちにネット将棋のレーティングでは僕を追い越している。  
TomatoMamaは、すでに幾人ものプロよりも上にいるのだ。

今まで気が付かなかったのが不思議なくらいだが、月子さんは天才だった。全集を読むだけでアマ高段者の実力を身に付け、すぐに奨励会に合格できるまで強くなり、そして順調に昇級・昇段していった。きっと僕が師匠でなくても、月子さんは強くなっていっただろう。

そういえば、自分が昇段を決めたとき、待っていてくれる人はいなかった。もちろんその場にいた人たちはおめでとうを言ってくれたが、僕にそれを言うために来た人はいなかったのだ。システム上、半年に二人はプロ棋士が誕生する。僕のような期待されない若者が、弱いプロになってしまうことだってある。それに比べ月子さんは、色々な人を巻き込み、そして僕らが待ち望む中で、プロになろうとしている。

時間の経過が、渦巻いているように感じた。一局目が終わってしまっていることを不思議に思い、二局目が長すぎるようにも思った。結果が早く出てほしいような、知りたくないような。

第一報が入った。自力だった一番手が勝った。まだ月子さんは他力だ。この時点で確率は四分の一。次点二回でフリークラス編入という制度もあるので、上がれなかったとしても勝つことが大事だ。

「つつこちゃんは、そういう星の下に生まれてきた気がします」

「え」

検討の手を止めて、突然辻村君は王将をつまみ上げた。それを見ながら、話を続ける。

「将棋界のことなんて知らずに飛び込んできて、三東さんのところにたまたま行って。それでこんなに早く駆け上がってきて。全然強そうに見えないし、弱気だし、内気だし。でも、勝っちゃうんですよ、彼女はいつも」

第二報が入った。それは、金本三段が勝った、というものだった。耳の奥で、血液がリズムを上げていく音が鳴り響いていた。辻村君と眼が合い、なぜか頷き合った。

それからの二十分。色々ことをしていたようだが、何もしていないようでもあった。月子さんは、もっと落ち着かない気持ちで待っていることだろう。

「前川三段、負けです。大屋、金本三段が昇段です」

第三報。僕や辻村君が反応するよりも先に、周囲の人々がざわついた。そして将棋のことなんて全く知らなかった記者が、言った。

「よかったですね」

「え……ええ」

信じていた。月子さんはプロになれるのだと。でも、信じられなかった。何を考えたらいいいのか分からない。

「三東さん……やりましたね」

「辻村君……やっちゃったね」

しばらくしてようやく、あっという間だ、そう思った。あの、玄関の前で初めて会った日から。頼る人のない少女と、頼りない僕。あそこからここに来るまで、あっという間だった。

それでも。ゆっくりと振り返れば、本当にいろいろなことがあって、長い長い日々だったとも感じる。

多くの視線が、僕の言葉を待っているのが分かった。つばを飲み、息を大きく吸って、吐き出した。

「でもまだ、これがスタートですから」

マスコミ用に用意していた言葉を、何とか僕は吐き出すことができた。

その後も質問が続いたが、何をしゃべったのかはよく覚えていない。



へとへとになって帰宅し、二人は同時に息を吐いた。やっぱり、家が落ち着く。

「疲れたね」

「……はい。なんか、いろいろと逃げたい気分です」

月子さんは今日一日で随分痩せたのではないかと思うほどだった。それでも僕らは、笑顔だった。当たり前だ。こんなにいい日はない。

「……不思議だね。月子さんがもう、四段になるだなんて」

「先生ももうすぐ五段じゃないですか」

「長くかかりすぎたよ」

二人でストロベリーティーを飲んだ。何度となく繰り返してきた時間。それがとても特別なものに思える。

「あの……先生」

「うん」

「家のことなんですけど」

「ああ」

勝ち越したら引っ越しと思いながら、結局一昨年、去年と惜しいところで達成できなかった。去年は指し分け、五割だった。しかし今年は好調で、六割以上をキープ。あっさりと勝ち越しを決めていた。

「僕も考えていたんだ」

「……その……わがままなお願いだとは思いますが……私、ここにいたらいけないでしょうか」

その瞳の中に、間抜けな顔の僕が見えた。

「……え？」

「一人前になったら、居候なんておかしいことは分かってます。でも……早く先生にお金返せるようにするには……このままの方が……」

「あ、ああ」

驚いた。月子さんの言葉にではなく、自分の先入観に、だ。四段になったら月子さんは立派な社会人だ。それなのに、彼女がこの家から出ていくななんてことは、全く考えたことがなかった。

「いや、僕は引っ越そうかと思ってたんだ。その……もう少し広くて、部屋もいくつかある所に」

「そうなんですか？」

「もちろん今日の結果がどうなるか分からなかったし……うん。いつまでもロフトでは、ってずっと思ってたから。勝ち越したら引っ越そうって、ずっと思ってた」

「私……あそこ好きですよ」

そう言った後、月子さんはずっと立ち上がると、ロフトに登って行った。そしてすぐに、右手に何かを持って、下りてきた。

「先生……私、隠しごとをしていました」

「隠し事？」

「これ、見てください」

月子さんが差し出したのは、一枚の便箋だった。一番上に「お父さんより 月子へ」と書かれている。

「月子へ

父さんは今名古屋のおじさんのところにいる。仕事を手伝いながら、何とかちょっとずつ借金を返してる。お前は、心配しなくていい。

母さんとは離婚した。

お前には何もしてやれないが、三東先生のところでプロになってくれると、嬉しい。

多分手紙はこれきりだ。元気にやっていってくれ。

いろいろと、すまなかった。」

「月子さん、これ……」

「先生がいなくて届いて……。三年前の、順位戦最後の日です」

その日のことを、思い返してみる。僕が家に帰ると、月子さんは一つの隠しごとを解き放った。

あれは、新しい一つの隠し事をするために必要なことだったのか。

「なんで隠してたの」

「……私、怖かったんです。母ともあんな感じで、父からもこう言われて、将棋を続ける理由がなくなる気がして……。私、いつの間にか、両親のことなんてどうでもよくなっていたんです。ただ強くなりたい、将棋を続けたい、先生に教わりたいてって……。だから、言えませんでした。ごめんなさい」

深々と頭を下げる月子さん。なんだか、すごく申し訳なくなってしまった。だって、僕にも隠しごとがあったのだから。

「それ以前に、君のお父さんに会ってたんだよ」

「……いつ」

「出張したとき、名古屋に泊まるって言ったでしょ。そのとき偶然」

「……そうなんですか」

「ごめん」

「……おあいこ、ですね」

二人の間に、新しい空気が生まれたのを感じた。弟子として、新しいライバルとして、そして金本月子として。僕は今、見ている。

細くて長い髪。短い睫毛。少し茶色が勝った瞳。小さな耳たぶ。全て、今初めて見たような気がした。

「家の話だけど……」

「はい」

「その……今さらだけど、ずっとロフトはやっぱり、きつかっただろ」

「そんなことないです。……よく、上から先生のことを眺めてました」

「……そうなの？」

「最初の頃は、本当にさびしかったんです。……でも、一人じゃないって思えたから。明日も明後日も、先生と一緒にだからって」

僕の前に現れた、十五歳の月子さん。彼女は小さくて弱々しくて、とても勝負師になるとは思

えなかった。しかし、性格なんて変わらないけれど、今の月子さんは立派なプロ棋士になろうとしている、堂々とした若者だ。

僕はたいして変わってないと思う。それでも、月子さんがいなければ、ひどい方へと変わっていたかもしれない。

「月子さん、君が選ぶなら、どうしたっていいんだ。一人で暮らしても、このままでも、ロフトを下りてきても」

「先生……」

月子さんの瞳を、その中に映る僕を見て、自分が少し卑怯な気がしてきた。僕の気持ちを、はっきりとさせるべきだ。

「いや……でも、一人で暮らす必要はないのかな。月子さんも僕も、それを望んでない……よね？」

「……はい。私、ここがいいです。ここ」

月子さんは、両手でテーブルを抱え込んだ。ここ。ずっと二人で暮らしてきた、この場所。ご飯を食べて、将棋をして、泣いて、笑った場所。

「でも、今日からはライバルでもあるからね。もし対局する日が来たら、一緒に連盟に行くってのも変だろうなあ」

「でも、面白そうですね。楽しみです」

師弟は、そう簡単には当たらない。二人とも、勝ちあがっていかないと。

次の心の目標は、二人で共有することになりそうだ。

なかなか話をやめることができなかった。不思議な夜が、深まっていった。



ようやく、日記帳が二冊目になった。結構さぼったので、一冊目を使い切るのに三年以上かかってしまった。

「月子さん、新人戦決勝へ」

それが、最後の一行。

プロになってからの月子さんは、僕とは全く違う道を歩んでいる。勝って勝って勝ち続けて、そうなると負けても話題になる。そして、目立てば対局以外の仕事も舞い込んでくる。聞き手、指導、さらには雑誌のインタビューまで。

気が付くと月子さんが出かけるのを見送り、一人家に残ることが多くなった。炊事や洗濯をしながら、専業主婦みたいだな、と思ったりする。

もはや、嫉妬することもなかった。毎日月子さんのことを見てきて、努力をしてきたことは十分承知している。人付き合いが怖いのに頑張って通い続けたことも知っている。両親と二度と共に暮らせない悲しみを背負っていることも知っている。だから、彼女は将棋で活躍すべきなのだ。

「本当は、まだ怖いんです」

月子さんは、そう言う。

「でも、学校は嫌いだったけど、将棋は好きだから」

注目されて、取材もされて、時にはいわれなき非難もあって。外で疲れ果てて帰ってきた月子さんを、この家で癒せたら。いつしか僕はそんなことを考えるようになっていた。

僕でなければいけなかったかどうかは分からない。でも、僕のもとで金本月子という棋士が誕生した。僕は初めて、誰かによって役割を与えられた。

僕自身は、一流になれないことは分かっている。必死になってしがみついて、ようやく五割一分といったところだ。でも、月子さんは違う。どんどん上を目指せるだけの才能がある。僕は、どこまでもその手助けをしたい。

「先生、ちょっと相談が」

「ん？ どうしたの」

それぞれの部屋はあるのだが、二人はリビングにいることが多い。広い家を持て余しているのもあるし、そばに誰かがいないと落ち着かなくなってしまったようだ。

「あの……三番勝負では、どんな格好したらいいでしょうか」

「ああ……考えたこともなかったな……」

もしこれからも活躍するのなら、和服なども必要かもしれない。タイトル戦で和服の男女が対戦することになれば、その光景だけでも画期的と言えるかもしれない。

「その、やっぱりスーツとか……」

「スーツ？」

「へ、変でしょうか……」

そう言えば、今まで新人戦の様子を見たことがない。皆和服を着て対局していただろうか。どちらにしろ、女性が一般棋戦の番勝負をするのが初なので、慣例も何もない。

「うーん。初めてのケースだし、わかんないなあ。でも、スーツじゃなくても」

「できればあんまり派手じゃないのがいいです」

「そっか」

それでいいのかもしれない。無理をして着飾らなくても、周りが勝手に言葉で装飾してくれるだろう。

「和服かなあと思ったけど……タイトル戦にとっとうか」

「はい」

力強い返事だった。本気で目指しているようだ。

初めて会った日の、か細い声を思い出す。あの時の少女は、もういない。そして多分、あの日の僕も。

それでいて思う。二人はあの日からずっと変わらずに、ゆっくりと歩み続けているのだ、と。

月子さんがトイレに行っている間に、僕は日記の最後の一行に、言葉を付け足した。

「ありがとう」

これから何度も思うことだろう。けれども、口には出せない。ありがとう、本当にありがとう。

一 棋譜

月子「はい、えー、はじまりました、対談です！」

幸典「え……なに、なんなのこれ？」

月子「あのですね、作者さんから『将棋のわからない人にも楽しんでもらえるような、おまけを』って注文があったんです」

幸典「はあ」

月子「それで、先生と対談しようと思って」

幸典「はあ」

月子「……乗り気じゃないですか？」

幸典「あんまり得意じゃなくて」

月子「駄目ですよ、喋りも慣れなくちゃ。講師とか解説とかのお仕事も増えないと生活厳しいんですから」

幸典「……（最近なんか厳しい）」

月子「とりあえず始めますよ」

幸典「了解」

月子「まずですね、作品中に出てくる『△3三銀』とかの記号について説明しなきゃ、と思うんです」

幸典「なるほど」

月子「とりあえず図を見てみましょう」



幸典「ゴキゲン中飛車の変化だね」

月子「そういうことではなくて……。まずですね、将棋は9×9の盤を使ってするゲームなんです。で、横を数字、縦を漢数字で表すんですね」

幸典「それで先手の手の時は▲、後手の手の時は△を付けるわけだ」

月子「将棋の駒にはいろいろな種類があるので、『手番・駒・位置』の順に書いて、図の場合『△3三銀』になるのです」

幸典「例えば二枚の同じ駒が同じ場所に行ける場合、先手の金が6八に行く場合は『▲6八金寄』とか『▲6八金上』とか書いて表すんだけど、まあ、細かいことはいいか」

月子「ですね。とりあえず本作では『あー、こういう盤面で駒動かしてるんだなー』ぐらいの感覚で見えていただければ」

幸典「(本当にしっかりしてきたなー)……まあ、こうして指し手を書くことで、一局の将棋を正確に記録できるんだよね」

月子「そうなんですよ。おかげで多くの棋譜として記録が残って、皆で勉強することができます」

幸典「僕たちは棋譜を売る商売だとも言えるわけで」

月子「先生も早くいっぱい棋譜が載るようになるといいですね」

幸典「……」

## 二 プロ制度

月子「次に、将棋のプロについてちょっと説明したいと思います」

幸典「うん。この作品に大きく関わるからね」

月子「将棋のプロになるには基本的には奨励会というところに入って、四段にならないといけないんですよ。二十五歳というタイムリミットもあります」

幸典「本作では順調に月子さんは昇級していったけど、実際には多くの人が苦勞して挫折するからね。あと、実際にはまだ女性で四段になった人はいないんだ」

月子「女性で奨励会に入る人自体少ないですもんね。私もこちらに出てきてから、男性社会なんだってことをすごく実感するようになりました」

幸典「最近は女性の割合も少しずつ増えてきているかな。あと、女性は女流棋士になるという選択肢もある。研修会というところで一定の成績を収めるとなれるんだ」

月子「私、そういうものがあることも知らなくて……。将棋のこと、もっと世間に伝わるといいなあ、って思います」

幸典「そうだね。情報が伝われば、もっと裾野も広がるだろうね」

月子「先生もタイトルとかは無縁そうだし、もっと普及に力を入れていけばいいですね！」

幸典「……」

## 三 将棋のできるところ

月子「あと、将棋が実際どういうところでできるのかも知りたいです」

幸典「確かに、指してみたいけどどこでできるか分からない、という人も多いみたいだね。まあ、一般的には将棋の道場があるね」

月子「私のお父さんはそこで強くなりました。アマ六段なんです！」

幸典「それはまあうん、そういうことにしておいて……。道場は席料というお金を払って、集まった人たちと対局できるんだ。プロの先生が教えてくれるところもあるよ」

月子「ただ、初心者には敷居が高い時も……」

幸典「そうだね。中には強豪ばかりがそろってたりして、入りにくいところもあるかもね。本当は強い人が優しく教えてくれたらいいんだけど。最近はネット将棋やゲームセンターで将棋を指す人も増えてきたよ。同じぐらいの棋力の人も見つけやすいし」

月子「私もネット将棋のおかげで随分実戦がこなせた気がします」

幸典「全国どこにいてもできるのが強みだね。あと、コンピューターソフトも色々あるから、これも勉強になるよ。うかうかしていると僕らも追い抜かれるかもしれないぐらいの勢いで強くなってきているしね」

月子「とりあえず、先生が抜かれたら私も危ないですね」

幸典「……」

#### 四 終わりに

月子「まだまだ将棋に関することは色々ありますねー。それだけで一冊本が書けそうです」

幸典「いずれ月子さんもそういう本書きなよ。きっと売れるよ」

月子「でも対局とか多くてなかなか時間が……先生こそどうですか？」

幸典「確かに僕は対局が少なくて書く時間があるからね……。まあ、要望があればこのあとがきを書き足す事もあるかもしれないかな」

月子「なるほど。電子書籍の便利なところですね」

幸典「本当に将棋の世界は楽しくて、色々紹介したいことがあるんだ。僕らの物語が、そのきっかけになればなって思うよ」

月子「そうですね。作者さんをもっと魅力を伝えられる話を書きたいって言ってましたよ」

幸典「その日は来るかなー。まあ、期待せずに待つとしよう」

月子「そうですね。では、明日も対局があるのでこの辺でそろそろ。みなさん、機会あればまたお会いしましょう！」

幸典「読んでくれた皆様、ありがとうございました！」

## お知らせ

---

月子さんがツイッターを始めました！([twitter.com/tsukiko\\_sann](https://twitter.com/tsukiko_sann))

将棋に関する質問などあればこちらまでお願いします！